

地域交流センター通信 26

March 2015, Volume 26

地域交流研究センターの一年を振り返る



都留文科大学地域交流研究センターとは？

地域交流研究センターでは、地域に根ざし地域と共同した活動を推進し、つぎのような取り組みをおこないます。

- 1) 地域交流に関するプロジェクトの推進
- 2) 学校の先生方などの教育相談
- 3) 地域のニーズに応えた貢献活動
- 4) さまざまな地域交流の連携の推進

題字 黒部行子

絵 成瀬洋平 (本学卒業生)

15.1.7
Y. Nishino

巻頭文：都留文科大学「地域交流研究センター」の設立とその理念

— 10年の歴史を振り返り、これからの見通す —

畑 潤 4

発達援助部門

子どもたちの素敵な笑顔のために

よりよい学級経営をめざして

志村潤子 6

「K-13法」を活用した学級経営サポート

宮野裕太 7

図工・美術教室における地域交流 — 今年度の取り組みから —

品田笑子 8

学校現場に出かける — 「非定住民」としてのSAT —

舘山拓人 10

堤英俊 12

フィールド・ミュージアム部門

「生きものに親しむキャンパスづくり」

つい寄り道したくなる場所に

身近な自然に目を向けて

伊藤瑠依 14

「キャンパスにリスを呼ぶ会メールニュース」の活動

川村修央 15

ムササビに一番近い大学を目指して — ライブカメラの一年の取り組みと今後の展望 —

鳥原正敏 16

【研究・教育活動】

環境ESDプログラム自然観察会 — 観察会をとおしてたくましく成長する学生たち —

加藤萌香 17

動物たちとふれあえる森づくり

坂田有紀子 18

都留文科大学附属小学校の環境教育

新田敏子 20

【展示・出版活動】

富士急行駅舎でのおもてなし

遠藤桂花・藤森春奈 21

【地域の自然や生活の記憶を収集し、保存し、活用する】

企画展「写真が伝える都留の思い出 — 未来へ贈る地域の記憶 —」を終えて

坂田有紀子 22

山梨県都留市谷村地域のウォーキングトレイル事業を

森屋雅幸 22

対象とした風景・景観からの地域特性抽出

相馬佑香 23

【地域の現代的な課題に取り組む】

カワラナデシコの保全活動をとおして生まれた地域交流

坂田有紀子 24

【地域を調べ、記録し、学びあう】

機関誌『フィールド・ノート』の一年

舟田早帆 26

『フィールド・ノート』の経験を活かす — 二冊の冊子の創刊 —

別符沙都樹 27

地域交流研究センターの教養科目

地域交流研究Ⅱ	― 記録と向き合い、言葉と向き合う時間 ―	西教生	30
地域交流研究Ⅲ	― 「山梨」を知り、歩き、知らせる ―	杉本光司	29
地域交流研究Ⅳ	― 「素直さ」 ―	藤森明日香	28

プロジェクト研究

田んぼの意義を広める	谷二ラボ4年目	初めて of 食育教室	西本勝美	31
			山森美穂	23
			平和香子	33

トピックス

平成26年度子ども公開講座（陸上教室）	― 楽しく走ろう！Run・Run・ラン！ ―	麻場一徳	34
現職教員教育講座	― 子どもが本気になる授業づくり ―	遠山佳代子	35
第17回「南都留地域教育フォーラム」を終えて		小俣義一	36
学級づくりの向上をめざす実践講座を振り返って		鶴田清司	37
シンガポールの学生との交流	― 「ボランティア」をキーワードとした交流 ―	滝口峯子	38
法政大学からのセンター視察	― 都留文科大学フィールド・ミュージアムを訪問して ―	須田英一	40
文大名画座『幸せの太鼓を響かせて』INCLUSION	― に込めたメッセージ ―	堤英俊	41
― インクルーシブなまちづくりへ向けて ―		高村直暉	24
都留市放課後子ども教室	― 子どもたちの世界に学ぶ ―	加藤敦子	43
県民コミュニケーションカレッジ	― 映画から見る韓国事情 ―	平井幸成	44
― 韓国社会の過去・現在・未来を探る ―			
青少年健全育成推進大会	― 青少年の健やかな成長を願って ―		

都留市まちづくり交流センター

都留市まちづくり交流センターの一年	― 都留文科大と地域をつなぐ架け橋として ―	佐藤理恵	45
-------------------	------------------------	------	----

第10回地域交流研究フォーラム

センターの歩んだ10年と新たな挑戦	― 図工・美術教育からの提案 ―	杉本光司	46
-------------------	------------------	------	----

都留文科大学「地域交流研究センター」の設立とその理念

—10年の歴史を振り返り、これからを見通す—

畑 潤

I. 都留文科大学に地域交流研究センターを設立する

私たちの大学は地方小都市の公立大学であり、地域社会に支えられながらその歴史を刻んできました。そのような大学と地域との交流の歴史を母体にして、2003年度に「都留文科大学地域交流研究センター」(以下「センター」と記す)を設立しましたが、大学と地域の自然、人々の暮らしとの交流経験を生みながら、その意味を意識的に問うていこうという、大学としての決意を表明するものです。

この「センター」を着想していく上で、動物行動学を専門とする今泉吉晴さんが拓いてきたフィールドの実践と探究は大きな意味をもっています。今泉さんと学生、市民、社会教育職員たちによるムササビと森を守る運動のことは、すでに広く知られていますが、今泉さんが運動にとりくみながら観察し深く感じとっていったことが、自身の探究の転機をもたらしたようです。そこには、分化し専門化していく学問状況に対する批判と、自らそれに囚われていくことへの自省の意識があったようで、そのような原理的な問いかけと結ぶようにして、自然と地域社会を観察する思想をみずみずしく語られるようになりました。今泉さんは、初代「センター」長として、第一回地域交流研究フォーラム(2005年)の基調講演で、「ムササビと森を守る会」の経験を語りながら、「私はこの経験をとおして、地域と関わることの大きな力と、学問の狭さを実感することになりました。」と述べ、次のようにも話しています。

都留での27年は、私にとって、人間的なつきあひを通して、再生し、自分を取り戻す作業でした。(『地域交流研究年報』創刊号、2005年5月)

このムササビと森を守る活動に、当時学長であった大田堯先生はつよい関心を示されますが、ムササビの観察に取り組んでいくことになった一人の女子学生と対話し、心動かされ、「彼女はこうした研究に協力することによって、思いもかけなかった自然の内側にある世界に遭遇し、かつ感動し、そこから自然と人間との共存という現代的課題を実感できるまでになった。」と述べてい

ます。(『わたくしの「都留自然博物館」』1983年、『地域の中で教育を問う』新評論、1989年、所収)

先生は、こうした今泉さんを中心にするフィールド実践に触れながら、「都留自然博物館」の構想を提案しますが、その本質を「私の構想する『都留自然博物館』……それは建物ではなくて、一つの人間関係の創造である。いや人間と自然との共存の関係を含んだ一つの新しい生きた社会の創造である。」と述べています。

II. 「自然」(nature)・「人間性」(human nature)を洞察する」と地域交流研究センターの理念

今日私たちが当たり前のように使っている「自然」(nature)という概念は、古代ギリシアの人びとが見出したものでした。彼らは、最初は文字通りの「自然」を見つめ、現象を生きた全体として観察し、そこに働く原理を洞察していきますが、そのような「自然」認識を、進歩的な医者たち、医学生たちが継承し、呪術を脱していき、「ヒューマン・ネイチャー human nature」概念を生み出します。さらにギリシア人は、徳性を本質的なものとする「人間」そのもの、つまり「人間性」(human nature)人間の自然性・本性)の洞察・探究に向かったのです。こうして彼らは、恣意的な主観を超える普遍的なものとして、人間の自由の精神、人格あるいは個人の価値、つまりヒューマニズム(人間の尊厳)の思想をつかみとっていったのでした。そこには、ポリス(都市国家)という彼らの共同社会を深く甦らせていきたいという切実な動機がありました。

この古代ギリシアの思想は、周知のように、その後、近・現代にいたるまで、全世界に根底的な影響を与え続けているわけですが、とりわけ「時代」と「社会」が危機的様相を呈するときには、たとえばルネサンス(文芸復興)のように、いつもこの古代ギリシアの思想がよみがえるのです。そして実は、いつの時代も、私たちは誰も成長の過程で「ルネサンス」(ヒューマニズムの覚醒)自由の目覚め)を経験していくことになるのです。この経験は、人間の肉体的成長といふことの根幹に該当することで、その豊かさ貧しさは、現代の人間と教養・教育をめぐる「問題」群の核

心となることがらです。

さて今泉さんは、都留でのフィールド実践・研究と並行しながら、アーネスト・シートンとヘンリー・ソローの「再発見」を進めていきました。著作『子どもに愛されたナチュラリスト シートン』（福音館書店、2002年）、ソロー著の翻訳『ウォールド・森の生活』（小学館、2004年）は、その「再発見」の記念碑となるものでしょう。今泉さんはソロー著について、「この本なしには私は都留を今のように深く愛することはなかったと思います。」と語っていますが（『地域交流研究 年報』創刊号）、ソローとシートンについて、次のようにも述べています。

二人の本は私にとって「アメリカの文芸復興」そのもので、私に人間にとつての自然の意味をしっかりと伝えてくれました。∴（それらは）私に、自然とは自然科学の対象といった意味をはるかに超えるものだを教えて、私の目をさましてくれました。（都留文科大 地域社会学会『地域社会研究』16号、2006年3月）

ところで大田先生は、都留文科大が、「文化」ではなく「文科」の名を冠していることについて、「文科」とはルネサンスの思潮に由来する humanities（人文学）、つまり「人間研究」のことであると述べています。先生はこのことを、都留文科大のアイデンティティに関わることとして、都留文科大の学生たちと共にあることを喜びつつ、繰り返し語っています。

Ⅲ. 地域の自然と人びととの交流のなかに

教養・教育の再生を見いだす

地域交流研究の「センター」は、都留の地で、都留の人びとに支えられながら、都留文科大の歴史を母体にして生まれ、今日まで育ってきました。「センター」設立への意欲が、社会学科、初等教育学科の学科「中期構想」と響きあっていたことは当然のことです。地域交流の実践を、「フィールド・ミュージアム部門」「発達援助部門」「暮らしと仕事部門」という三つの部門で構成してきたことも、「センター」を包んでいる歴史と理念に由来する

ことです。

この十年余の間に多彩な交流実践が積み重ねられてきていますが、その内容は、この『通信』の各号や、毎年の『地域交流研究年報』から知ることができます。その中で、北垣憲仁さん（本学特任教授）と学生たちによって刊行され続け、すでに84号を数えている『フィールド・ノート』の実践は、大学の教育と研究に新しい分野を拓いているものとして、格別に注目する必要があるでしょう。

編集部員によって観察や聞き取りが行なわれ、改めて地域の自然や歴史、人びとの生活、生業のことなどに光があてられ、記されていきます。一人の市民は、この『フィールド・ノート』は、「私がいいつも見過ごして、そこにあっても見ていない、通り抜けているもの、私にとつては都留の水脈（というべきもの）をすくいあげて、みんなに見せてくれていた。」と述べています。（第9回地域交流研究フォーラム「フィールド・ノート10周年からみえる未来」、『地域交流研究年報第9号』2013年9月、所収）また一人の編集部員は「自分で自発的に何かをするということはなかなか高校のときに無かった」と述べ、何度も繰り返される共同の原稿直しのことを語りながら、次のように発言しています。

赤入れの苦しさを乗り越えたからこそ、改めて人とのかわりを自分なりにどう解釈できたのかっていう、自分のなかの芯の奥の底まで突き詰めることができたっていう思いがあつて、∴本になったのを見たとき、「わたし、ここまでできたんだ」って、そういう達成感が∴毎号あります。（同上）

ソローは『ウォールド・ノート』森の生活』を一人で執筆しました。『フィールド・ノート』は、市民を含む多くの人によって生み出されています。こうした、人間的な出会いを生み出す共同の実践過程は、人間性回復の意味をさまざまに考えさせてくれます。『フィールド・ノート』の実践は、そして地域交流研究センターの諸実践は、地域社会の再生と人間性の回復という思想に関わる、多くの内容的、方法的価値を提示しつつあると思います。

（はた じゅん・本学名誉教授、本誌初代編集長）

地域交流研究センターの一年を振り返る

地域交流研究センターは、2003年の発足以来、本学独自のさまざまな事業に取り組んできました。それらの取り組みは、大学と地域とを結ぶ豊かな諸実践として実りつつあります。今年度は、各部門の事業に参加した方がたの感想を中心に地域交流研究センターの一年を振り返ります。また、センターに関連した事業（トピックス）や第10回地域交流研究センターフォーラムの報告も掲載します。

都留文科大学地域交流研究センター・地域教育相談室主催

第1回公開講座 「いじめを生じさせない学級づくり」

平成26年5月16日（金）に、以前、「NHKプロフェッショナル」に出演された高知大学教育学部附属教育実践総合センター准教授の鹿嶋真弓先生（博士・カウンセリング科学）を講師にお迎えして第1回公開講座を開催しました。「いじめを生じさせない学級づくり」というテーマは関心が高く、学生125名、教育関係者や保護者など80名、合計205名のかたが集まり、研究者でもあり実践者でもある鹿嶋先生の熱いご講演に熱心に聴き入っていました。その参加者の中から2名のかたに感想を書いていただきました。

子どもたちの素敵な笑顔のために

■ 志村潤子

地域交流研究センター主催の第1回公開講座「いじめを生じさせない学級づくり」に参加させて頂きました。

初めにスクリーンに映し出された写真は衝撃的でした。人間に抱っこされた猿の写真なのですが、人間が怒った顔しか見せない猿は、笑わない猿になってしまいい、逆に、人間が笑いかけた猿は、かわいい笑顔の表情を見せるのだそうです。

鹿嶋先生は、「学ぶとは、まねること」とおっしゃっていました。つまり、子は、親を見て親のように育つ、大人を見て大人のように育つので大人の行動がとても

大切だということでした。今回のテーマである「いじめ」も大人の行動でそれを防ぐことが出来るし、大人の声かけ一つで子どもの意識を変えることができることを最初の猿の写真は意味しているのではないかと思いました。

私は、小学校の教員をしています。普段の学級づくりがとても大切で、どの子どもも、みんな安心して学級のなかで過ごせるようにしなければならぬと思っています。しかし、いろいろな子どもがいるなか、個々に合わせた対応が求められます。また、毎年学級のカラーもさまざまで、学級づくりが非常に難しいの

が実情です。

今回の講座に参加し、学級での子どもたちへの声かけの仕方、学級集団のつくり方など、先生の話にはたくさんヒントが隠されていました。実践に裏づけられた先生の話は、とても心に響くもので、あつという間に時間が経ちました。

子どもたちが安心して教室で過ごせるために私たちがすべきことを、1時間半という短い時間のなかで多く学ぶことができ、自分の行動や声かけを見直すよききっかけとなりました。

いじめは、フラストレーションやストレスの大きさにより起きることが多くあり、学級の状態が良くないなかで、どの子ども被害者や加害者になる可能性があるそうです。子どもたちをいじめに向かわせないためには、単発的ではなく、生活・授業・活動を日常的に充実したものにしていかないといけないそうです。

鹿嶋先生は、何よりもまずは授業づくりが大事だとお話されていました。子どもたちが過ごす学校での多くの時間が授業です。わかる授業づくりを進め、子どもたちが充実し、満足する気持ちをもつよう努力していきたいと感じました。

また、子どもたちが、他人の役に立っている、他人から認められているといった自己有用感が獲得できるような居場所づくりが大切だと思いました。学級で子どもたちが行なっている係活動は、責任だけでなく権限があるということです。私の学級でも、一人一役の係・当番活動を行なっていますが、一人一役は、褒められたり、活躍できたりするチャンスを与えているのだという発想に気づかされました。一人ひとりが認められる場を担任として見過ごさず、生かしていきたい



(じむら じゅんこ・都留市立宝小学校教員)

と思いました。
鹿嶋先生の話されているなかで、「困った子は、困っている子」という言葉が心に残りました。教師から見て困った子は、じつは困っている子なのです。困っている子には、いろいろな方法でアプローチし、また、変化が必要なきときには、自分の言葉がけを変えてみる必要がそうです。大人の働きかけ、教師の働きかけは、非常に大切なものと改めて感じました。
先生のお話のなかには、明日からの学級づくりですぐにできそうなこと、取り組んでみたいことがたくさんありました。子どもたちが互いに認め合えるエンカウンターも教えて頂きました。学級集団をどうつくりあげるかは、教師の力量に大きくかかっています。子どもたちが充実した学校生活を送れるよう、今日の講座で教えて頂いたことを胸に、一步一步前進したいと思います。子どもたちの素敵な笑顔のために……

「よいよい学級経営をめざして」

■ 宮野裕太

「クラスでいじめが起こったらどうしよう。どうすればいじめを予防できるのか。」私を含め、教師を志す多くの学生は、おそらくこのような不安を抱えていると思います。この不安を解決する具体的な方法、また、よりよい学級経営とは何なのかを鹿嶋先生の講演を聞いて、考えを深めることができました。いじめは絶対に許されない行為であることを、教室内で生徒に説くだけでは、十分な予防策とは言えません。日常的によりよい学級経営に取り組むことで、学級の体質改善につながるのだと思います。

友達、教師、家庭、勉強など、さまざまなストレス（ストレスの原因）からストレスを感じ、いじめ被害につながってしまいます。友人からのちよつとした一言や、生徒のために発した教師の一言が、生徒にとってストレスになる場合があるのです。しかし、違う見方をすると、教師の言葉でそのストレスや不安を解消することができます。元氣のない生徒に励ましの言葉をかけたり、傾聴の姿勢で生徒の気持ちを理解しようとするのは、教師になったらすぐに実践できることです。

鹿嶋先生の実践例のなかで、エンジェルハートという活動がありました。これは、クラスの生徒の名前が書かれたくじを生徒一人一人が引き、そこに書かれた人のエンジェルとして一週間、その人を助けてあげるという活動です。聞いただけでも心が温まります。一週間後に振り返りをして、一週間どのように感じたか、また、今の自分の気持ちを書いてもらいます。これに

より、生徒同士がつながり、他者に興味をもち、さらには「自己有用感」につながります。このようないじめを生じさせない学級づくりを目指すことは、不登校や学力不振も改善できると感じました。
「子どもは親の思うように育たない、親のようには育つ」鹿嶋先生の講演のなかで、一番印象に残った言葉です。「親」を「教師」に置き換えて読むこともできます。教師の言動を見聞きして、生徒は育つということです。平成25年6月に、いじめ防止対策推進法が公布され、国を挙げての対策が本格化しています。毎日子どもたちの前に立つ教師が、率先していじめ対策に取り組まなければなりません。鹿嶋先生の講演で、私自身、将来教師を志す者として、その使命を強く感じました。

(みやの ゆうた・英文学科4年)



講演された鹿嶋真弓先生

「K-13法」を活用した 学級経営サポート

■品田笑子

地域教育相談室の活動で力を入れているのは学級経営のサポートです。

学級に所属する子どもたちにとっていごちがよ、意欲的に学習や活動に参加できる集団にするには二つの条件をクリアする必要があります。一つめは、みんなが安心安全に気持ちよく過ごすための共通の約束事や行動様式（ルール）が全員に共通理解され、そのもとで活動ができています。二つめが、教師と子どもたち一人ひとりの間及び子ども同士に互いの存在を尊重し合う関係（リレーション）が成立していることです。この二つは同時成立が必要で、その状態の確認に活用できるのが「Q-U・楽しい学校生活を送るためのアンケート」です。

「K-13法」は、Q-Uの開発者である河村茂雄氏（早稲田大学教授）が考案したもので、インシデント・プロセス法（ポール・ピコーズ考案）、ブレインストーミング法（オズボーン・F考案）、KJ法（川喜田二郎考案）の一部を活用した、メンバーの全員参加による集団思考・体験学習型の事例研究方法です。

Q-Uのデータと教師の観察結果を統合して学級や個々の状態を把握し（ステップ一）、なぜ問題が発生したか、またはその問題が解決されない

まま維持されているかを推測し（ステップ二）、改善方法を考える（ステップ三）ものです。学校を訪問してこの方法を紹介しながら、提供された事例の学級について一緒に考えます。その体験を自分の学級経営にも役立て、やがては学校で、自力で展開できるようになってほしいと思っています。留意点は事例を提供した教師が傷ついたりやる気を失ったりしないようにすることです。

子どもたちは新学期に新しい担任や仲間と出会い、そこで1ヶ月程度過ごすうちに、このクラスはいやな思いをすることが少なくみんなと仲良く過ごせて勉強や活動が楽しい、担任の先生は自分のことを見ていてくれる、などと学級に対する思い（満足度）が固まってきました。集団は過半数の傾向に方向付けられると言われています。つまり、この満足度が高い子が多ければ多いほど学級は安定する方向に動き、その反対だと所属するのがつらいと感じる方向に移行しやすくなります。その傾向を早期に把握し、二つの条件のうち、ルールが未定着ならその要因を予測し改善策を考えます。リレーションが不足している場合、ルールとリレーションの両方が確立していない場合も同様に原因を予測し改善策を考えます。その後、改善策を実践し、いごちがよく全員の満足度の高い



先生たちとQ-Uの結果を分析している様子

学級を目指します。

一定期間の実践後に成果を確認し、順調なら継続、思わしくないならさらに検討して改善策を考え実践する、というPDCAサイクル*の学級経営になり、「K-13法」はC(チェック)の段階になります。私たちの体質改善に例えれば、人間ドックのデータがQ-Uのデータで、それを自分の日常生活の状態と付き合わせ(ステップ一)、血圧が高い原因は塩分の取り過ぎと関係があるのではないかと予測し(ステップ二)、食生活の改善方法を考え(ステップ三)、実際に実践し、また人間ドックを受けるとい感じになります。

研修会では各ステップごとに結果を発表してもらい、最後に私が見解を伝えます。実は一番苦戦するのがステップ二です。ある学校では、年度途中で担任が交代した学級を取り上げ、三つのグループに分かれてこの事例研究を実施しました。なぜか担任のいるグループがなかなかまとまりませんでした。このときの私の見解は「新しい担任の関心を買うために男子は試し行動で困らせ、女子は努力をしているのではないか」でした。先生がたが納得したときには一瞬の間の後、ため息が漏れます。この時もそうでした。ここまで把握できるとステップ三は教師の得意とするところですが、いっぺんに雰囲気明るくなってアイデアがどんどん出てきました。

担任のいたグループがまとまらなかったのは、メンバーがいろいろ質問をして情報が多かったことが一因です。このように情報が多すぎて整理できないことはよくあることです。子どもたちと一

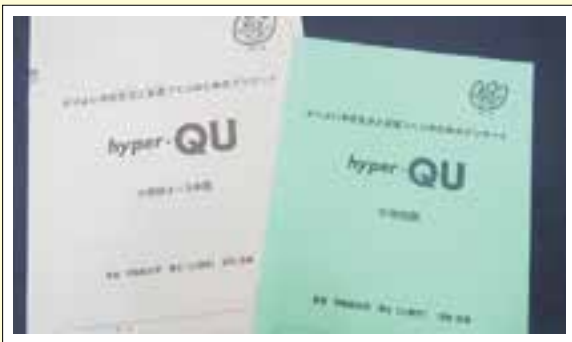
緒においてよく見ているからこそ分かることと見えなくなる場合があります。ゆえにこのような事例研究を通して教師同士が協力し合う方法、情報整理の視点を知ることが必要になってくるのだと思います。そしてそのお手伝いを本相談室ができればと考えています。

(しなだ えみこ・本学地域交流研究センター特任教授)

参考文献 河村茂雄(著) Q-U入門

図書文化社 二〇〇六

*PDCAサイクル目標を設定して実施計画を立て(Plan)、それに基づいて実施し(Do)、その結果を途中で測定・評価し(Check)、必要な場合は計画を見直したり改善したりし(Action)、またPlanにもどるとい螺旋を描くようなサイクル。W・エドワーズ・デミング博士が提唱した考え方。



先生たちとQ-Uの結果を分析している様子

図工・美術教室における地域交流

—今年度の取り組みから—

■ 館山拓人

図工・美術教室は、近年教育現場との関わりから、多方面にわたり実践的な取り組みをしてきました。本誌面では、今年度関わった3つの取り組みについて紹介いたします。

都留市教育協議会美術部会における美術研究会

毎年夏季に、地域の小中学校の先生で組織される都留市教育協議会美術部会主催の美術研究会が、図工・美術教室の施設で開催されています。これまで研究会では、今日の図画工作教育の諸問題や課題を共有し問題解決のためのさまざまな議論を交わしてきました。

本年度は8月20日（水）に開催し、小学校教員4名、中学校教員1名の参加のもと、教材研究の観点から、地域の材料を活用した工作「板材（杉）による動くおもちゃ」を製作しました。この課題はキッド教材に頼らず地元の杉の木を材料にするので、子どもたちの創意工夫が促され、地域特性を理解する態度も育まれるのではないかと期待するものです。現職の先生方は全教科を指導していかなければならない多忙な業務のなかで、図工の教材研究に特化して取り組むことは難しい現状があります。ですが先生がたからは、「これなら子どもたちは興味をもつかも」、「やってみよう」といった意見が寄せられ、とても有意義な研究会となったのではないかと振り返っています。

第10回地域交流研究フォーラム

—図工・美術教育からの提案

2014年9月27日（土）、発足10周年にあたる記念の地域交流研究フォーラムにて、図工・美術教育と情報教育が連携した新しい取り組み「たからばこ作戦」について発表しました。（発表者…鳥原正敏教授、杉本光司教授、館山拓人、大輪知穂情報センター職員）

研究代表者の鳥原先生からは、「たからばこ作戦」とは、図画工作の活動や作品を画像・映像化しクラウドサービスのデータベース『たからばこ』を使って児童、教師、大学生そして研究者が共有、活用することを目指す研究活動であり、この実践を通して一方的な表現活動や受動的な鑑賞活動だけではなく、双方向に『心のコミュニケーション』を行なっていくものである』との説明がなされました。また、研究分担者の杉本先生、職員の大輪さんは、データベースシステムの構築や構成、及び画像の登録などの操作方法について実演を交えて説明し、館山からは研究報告として、教職をを目指す大学生への教育的可能性について実践例をもとに紹介し、図画工作の鑑賞活動における支援の可能性について発表を行いました。

会の後半は座談会形式となり活発な意見交流がなされました。研究協力者の都留市立旭小学校の渡辺雅彦教諭からは、この取り組みによって製作された映像を

鑑賞した子どもたちの様子について、同じく協力者の西宮市造形教室の上田由紀子先生からは、造形教室での作品製作の過程において工夫されている点などについてスライドを交え発表がありました。また助言者として参加された東京藝術大学美術教育研究室の小松佳代子准教授は、「子どもたちが作品を作る過程をどのような経験にするかはその後の言葉かけひとつで変わってくる。『たからばこ作戦』をおして図工・美術教育の可能性が広がるのではないかと発言があり、フォーラムを締めくくりました。

参加者からも「平面作品は保存しても立体作品は収納場所の関係で保存が難しいこともある。子どもたちの成長の証として保存されることは、子どもたちの達



フォーラムで主旨説明をする鳥原教授

成感を維持するためにも、この試みは注目されるべきものだと思つた。また、画面を通したコミュニケーションは、今後多様な活用が期待でき、楽しみである。」と感想をいただき、今後の取り組みに強い期待が寄せられています。

谷村第二小学校における体験学習会「陶芸講座」

2014年10月18日(土)、谷村第二小学校において体験学習会「陶芸講座」を実施しました。この体験学習会は、親子で活動してふれあいを深めることを目的に、本講座の他に地域のかたによる「うどん作り」「しめ縄作り」など、あわせて8講座で構成されています。昨年度より、小学校からの依頼で本学の図工・美術教室が本講座の担当となり、当日は私の他に鳥原正敏教授、非常勤講師の竹内紋子先生、図工・美術教室4年生の長谷川仁義君、2年生の石原あすみさん、加藤萌香さん、西野喜人君、合計7名で親子41名の指導にあたりました。

当日の様子について2年生の西野君は次のように話してくれました。

今回の陶芸講座は、私にとって小学校で支援活動を行なう初めての機会でした。そのため、とても緊張しましたが、好きな創作の活動を通して子どもたちと交流をもてる機会とあって、とても楽しみにしていました。

当日、先生方からの制作手順の説明後、あるご家族の体験活動のアシスタントをすることになりました。制作の序盤に子どもたちは説明を聞きつつも『できないよう』との声が聞こえてきました。容易に作れる内

容とはいえ、子どもたちが作るとなると難しい行程もあるようでした。そこで私は、子どもたちには作ることを楽しんでもらうことを目的に、サポートはほどほどにむしる随時少しずつ背中を押してあげながら子どもたち自身ができるだけ自分の力で完成へと近づけるように取り組みました。

しばらくして作品の原型が出来上がり、これから自分たちで思い思いにカップのデザインをする時となりました。どの子どもたちも保護者の方々も思い思いのデザインに仕上げていきます。好きなキャラクターをカップに施したり、箸置きやお皿を作ったり、図画工作ならではの活気が会場に満ちていました。

陶芸講座を終えて、私が担当した子どもたちは何度も振り返ってキラキラした笑顔で挨拶をしてくれました。子どもたちが作った作品には陶芸ならではのあたたかい指の跡が残っていました。この講座で、子どもたちが途中戸惑いながらもそれぞれの思いをこめて作品を完成させていくのを見て、私は自分自身の昔と今の姿、造り出すことの喜びの姿を見たような気がしました。最初は、上手くいかなくてたとえ自分の作品に劣等感を感じることがあっても、自分で考え、時に誰かの助けを受けながら乗り越えていったのなら、その困難がかえって喜びの源となり制作体験一つ一つを温かい思い出として残してくれるのではないかと感じることができた実り多い体験でした。

(たてやま たくと・本学初等教育学科
図工・美術教室 特任准教授)



釉薬がけをする学生たち



美術研究会で制作された作品

学校現場に出かける

「非定住民」としてのSAT

■堤 英俊

私が、都留文科大文学部初等教育学科に着任して1年が経とうとしています。着任早々、地域交流研究センターの発達援助部門のSAT事業の担当となり、特に、今年度は、SAT-Cの活動を中心に、学校現場に出かける学生たちの1年を見つめてきました。

そもそも、SATとは、都留文科大から都留市内の小中学校に派遣される学生アシスタントティーチャーのことで、活動の形態には3つの異なるタイプがあります。①放課後指導に継続的に関わるSAT-A、②授業中にT・T（チーム・ティーチング）の一人として子どもに関わるSAT-B、③「学力不振」「不登校傾向」「障害」などの困難を示す子どもに対して個別支援を行なうSAT-Cです。そうしたSAT活動の目的は、重層的な「子ども体験」にもとづく実践的指導力をもつ教師養成の深化・発展を図ることとされています。前後期、各250名ほどの学生たちが学校現場に出かけています。

今年度のSAT-Cでは、まず4月に、各学校から提出されたニーズ票と受講学生からの希望票をもとにしながら、学生と子どものマッチングを行ないました。その後、それぞれの学生

が各学校に向いてオリエンテーションを受け、SAT活動をスタートさせました。大学内では、学生たちがSAT活動に馴染んできた時期を見計らって、隔月でのケースカンファレンスを開始し、聴き合いの姿勢を基本にしながら、それぞれの子ども理解と実践を相互に振り返る機会を設定しました。今年度のケースカンファレンスでは、「分かんない」「やりたくない」の一点張りの子どもの真意「子どもによってノートに書き記された『疲れた』の意味」「挑発的・攻撃的な態度で接してくる子どもの意図」「コンプレックスを意識しているように思われる子どもへの対応」「SATに行つて疲れる私（学生）」「悩みをきいてあげなければならぬ」と焦つてしまう私（学生）などが話題に上りました。ケースカンファレンスの場では、子どもとのやりとりのなかでの「実感」「体感」を、借り物の言葉ではない「しつくりくる言葉」で表現することが奨励され、学生たちは、1人ひとりの子どもの内面や生活現実を丁寧に理解しようとする態度だけでなく、実践のなかで自分が覚えた感覚に真摯であることやそれを「ことば」にすることの大切さについても学んでいったように思います。SAT-Cの活動を経験し



今年度のSAT活動の様子

たことよって学生たちの教育に関する意見や主張に足場ができ、ゼミなどの他の授業での議論にも深みが出てきたように感じられました。

私の前職は、義務教育段階の学校（特別支援学校）の教師でした。特別支援学校という実践の場の特徴から、ここでは、複数の教師たちで1つの学級を担任し、1年間を通してじっくりと「あ・うん」のチームワークを育みながら、授業づくり・学級づくりを行っていました。「あ・うん」は教師たちの間だけでなく、教師たちと子どもたちの間でもそうで、1日の活動を、教室を構成するメンバー全員でつくり出していたような感覚があります。特別支援学校と通常学級とは少々違いはあるとは思いつつも、私の元教師としての肌感覚からすれば、日替わりや時限替わりでさまざまな学生が教室に入ってきて、十分な事前打ち合わせもないままに予測不能な動きをされるというのは、いつもいつも歓迎される事態ではありません。今回、SAT-Cでは、例年のことでもあるようですが、SATの「子どもからは『先生』と呼ばれるが教師ではない」という曖昧な立場に戸惑い、葛藤を覚えた学生も少なくありませんでした。私個人としては、完全に教師役になりきるなどしてその葛藤をすくさま解消しようと躍起になるのではなく、学生には、学校という場が、教師たちや子どもたちにとって教育・学習の場以前に「生活の場」であるということを実感するとともに、「非定住民」としての自覚の上でそ

の学級状況のなかで何ができるかを考えてほしいと思っています。

学生のSATという立場とは少し異なるのですが、私もまた（一研究者として）、今年度の後期から、都留市内の或る小学校に毎週1回の参与観察に入らせていただいています。私の研究テーマの1つである「インクルーシブ教育」に関わる調査研究で、来年度以降も続けていきたいと考えています。「非定住民」としての学校参加という点ではSATの学生と共通しており、先に書いたような葛藤は共感できることでもあるので、その立場性の自覚の上で当該学級のなかで何ができるかということ、我が身のこととしても考えていきたいと思っています。

最後に、今年度、ご協力いただいた都留市内の小中学校の先生がた、どうもありがとうございました。来年度以降も学生共々どうぞよろしくお願いいたします。

（つつみ ひでとし・本学初等教育学科教員）



SAT-Cのケースカンファレンスの様子

■生きものに親しむキャンパスづくり

フィールド・ミュージアム部門では、キャンパスを「自然に親しむ入り口」と位置づけ、附属図書館に隣接するビオトープの整備や、一号館に隣接する「つるりん」の手入れと世話をこなしています。このほかにも、キャンパスでリスとの出会いを楽しむ「キャンパスにリスを呼ぶ会」、ムササビの生態を多くの人と観察し解き明かそうとする「ムササビ・ライブカメラ事業」、テントウムシの越冬の様子をもとに自然の動向をみんなどで見守っているという「テントウムシの越冬を見守る会」などの活動に取り組んでいます。

ついでに寄り道したくなる場所に

■伊藤瑠依

ビオトープ委員会は昨年度の夏に発足し、現在6人のメンバーで毎週木曜日午前9時30分から活動を行っています。ふだんはおもに、剪定や掃除、水やりなどをしており、軍手に剪定バサミとほうきを持った姿が私たちの定番となりました。

今年度の春には、ユズ、イチジク、プラムといった食べられる実のなる木を植えました。初めは30センチ



プラムを植樹するようす。
日当たりがよく、生長してもほかの植物に影響がない場所を選んだ

ほどだった苗木も今は根付き、70センチほどに生長しています。実がじっさいに付くのはもう少し先になりそうですが、自分たちで育てた実を食べられる日が待ち遠しいです。

春のビオトープは多くの植物が花開きます。モモの花に似た形でピンク色の花を付けるアーモンドや白くて小さな花をたくさん付けるウツギ。小径を通るとき目に入る花々は、気持ちまで楽しくさせてくれます。

夏には、ビオトープの池に山梨県産のメダカの稚魚を放流しました。近年数が減り、見られる機会も少なくなりました。メダカですが、地域交流研究センター前スロープの池とビオトープの池で見ることができます。また、夏場の植物の生長には驚かされました。週に一度の活動のため、一週間見ないだけでも草木が生い茂り、前週とはまったく違った光景になっていることもありました。

現在は、春に向けて木の剪定をしています。ノコギ



ビオトープで見られたツバメシジミ。
この日は二匹見ることができた
(2014年8月5日、西教生=写真)

りで一本いっぽん手作業で剪定しているため、以前は一本の木の剪定を終わらせるのに二回分の活動時間を要していました。しかし今では一度の活動で剪定を終えられるようになりました。

この1年間の活動を通し私たち自身も変わっています。植物の生長の早さに驚かされたり、自分が手入れした草木が生長することに喜んだり、活動をするにつれてビオトープへの愛着がわき、活動時間外でも足を運ぶことが多くなっています。これからはそういった気持ちをほかの人にも感じてもらいたいと思います。お昼ごはんを食べるとき、友だちと話をするとき、癒しの場所として学生や市民のかたに活用されるようなビオトープを目指して活動していきたいです。

(いとう るい・社会学科環境・コミュニティ創造専攻2年)

都留文科大学には、40年前から、今で言う「ビオトープ」がありました。40年の歳月を経て、当時植えられた稚樹は大木になり、夏には涼しい木陰を、冬には落葉した木立の間から暖かい日差しをもたらしてくれる天然の「緑のカーテン」になっています。林内には約80種類の植物が生育する多様性の高い「つるりん」ですが、昨年春に「つるりん」始まって以来のビッグ・ニュースがありました。今回、初等教育学科の川村君がそのニュースをリポートしてくれました。

身近な自然に目を向けて

■川村修央

都留文科大学の学内には、ちょっとした林がありません。その名は「つるりん」。かわいらしい名前ですね。場所は、大学1号館とグラウンドの間です。ただ、この林は人工のもので、私のゼミの指導教員である坂田先生によれば、40年ほど前に当時の教職員が近くの山で苗木を集め、それを植えたことによって出来たのが現在の「つるりん」だということでした。林内には、大きな木が何本も生えており、これが人工のものだな

なんて、はじめはとても驚きました。さて、この「つるりん」を管理し、調査、研究しているのが、私の所属する生物ゼミです。年2回の下草の除草やゼミの時間内での定期的な観察のほか、専攻科目の「生物学実験」でも林内の生きものの調査を行いました。

では、ほんの一部ですが、この1年で私が「つるりん」で見た生きものについて紹介したいと思います。つるりんは東側に広葉樹が多く、西側に針葉樹が多く生育しています。それぞれの環境下では林床にもさまざまな植物が自生しており、その花や実を求め、林内にはさまざまな鳥や昆虫が訪れます。さらに、過去には夜、野生のタヌキやテン、野ネズミが動く姿も観察されました。このようにさまざまな生きものが暮らす「つるりん」のなかで私が今回もつと紹介したいのは、ブナの実生です。実生とは、植物の赤ちゃんのこと。昨年5月の観察では、たくさんの実生が林内で観察されました。これは、とても珍しいことだそうで、坂田先生によれば昨年の大雪が関係しているのではないかとのことでした。それにしても、わずか数cmの実生が



ブナの実生



生まれたばかりのブナ

何10mもの樹木になるのですから、生きもののもつ生命力には、本当に驚かされます。ただし、多くの実生は幼いうちに枯死してしまうのですが。それでも、今回観察した実生のうち、1つでも多くのものが大きく立派な木になってくれることを願わずにはいられません。

いかがでしょう。意外にも身近なところに、今まで気づかなかつたさまざまな生きものがあることは多いものです。有名な国立公園に行くのもよいですが、豊かな自然は、意外と自分の身近なところでも見ることが出来るのではないのでしょうか。

(かわむら しゅうおつ・初等教育学科3年)

『キャンパスにリスを呼ぶ会メールニュース』の活動

■鳥原正敏

キャンパスにリスを呼ぶ会が発足して本年度で4年がたちました。これまでフルミの苗木の植林や餌台の設置を行なうとともに、会員に向けてメールニュースの発信を行なっています。18号のメールニュースでは、加藤萌香会員からカナダで出会ったリスについて報告がありました。

カナダサスカチュワン州リジャイナのリス

加藤萌香（初等教育学科2年）

私は語学研修のためこの夏8月から9月にかけての1ヶ月間、カナダのサスカチュワン州にあるリジャイナという場所に行きました。

リジャイナの夏は、日本よりも湿度が低く過ごしやすく感じました。しかし日中と夜の気温差が激しく昼間は夏、夜は冬のように感じました。街中はとても緑が多く、学内の庭や住宅地などにはリスやブリーダードッグなどの動物たちが暮らしています。

カナダの人にとって生きものが身近に暮らしているということは当たり前前で、驚くこともなくそつと見守っている様子でした。そのため生きものたちも人を怖がる様子はなく、のびのびと気ままに過ごしているようでした。ときには彼らのほうから近づいてきてくれることも。また、私がリジャイナ大学に行くまでの通学路には、リスが頻りに現れる場所があります。ある日の朝、電柱の上で一匹のリスがもう一匹のリスにナッツを渡している姿を目撃することができました。

リスを観察したいがために私の登校時間はどんどん早くなっていきました。その場所には二種類ほどのリスがいるようである朝はオレンジがかった毛色のリスが、また別の日には茶色

がかった毛色のリスを見ることができました。同じ場所に異なる種類のリスが共存しているとは驚きです。野生の生きものを近い距離で何度も見ることができたというのはとても貴重な経験だったと思います。

新たな活動意識の芽生え

加藤会員の報告を読むと活動を通してリスについて興味を深め、さまざまな場面でリスとの出会いを楽しんでいる様子が見えます。またこういった活動意識は他の会員にも広がっています。本会は、キャンパスにリスを呼ぶことを第一の目標としながら、活動を通して人とリス、人と人のつながりをつくり、自然や環境への興味を広げることが重要であると考えています。こういった意味においてメールニュースはとても大切な活動です。

最近はその活動の様子が新聞でも取り上げられるなど学外でも興味をもって頂いているようです。うれしいことに6月頃から図工・美術棟の周りに設置した餌台にリスの食痕が見られるようになりまし。姿は直接観察されてはいませんが、どうやらリスはかなりわたしたちの近くまで来ているようです。今後活動についてメールニュースを通して多くの方とリスとの出会いや環境について話題を共有したいと思っています。

（とりはら まさとし・本学初等教育学科教員、
キャンパスにリスを呼ぶ会会長）



ホームステイ先の屋根を走るリス。家にリスが来るとは驚きでした
(撮影：加藤萌香)



リジャイナのリス。意外と大きい印象を受けました
(撮影：加藤萌香)

ムササビに一番近い大学を目指して

—ライブカメラの一年の取り組みと今後の展望—

■ 加藤萌香



前年は美術棟横

にかけて巣箱に、ついにムササビが入りました。春には子育ての様子もライブカメラを通し、リアルタイムで観察することができました

した。昼間、子どもたちが巣箱のなかで飛び跳ねるなか、疲れているのか顔を踏まれても寝ている母ムササビ。子育てが大変なのは人もムササビも変わらないのだな、と思ってしまう。

真夏は、一番気温があがる正午過ぎになると暑くて寝ていられないといわんばかりに、涼しさを求めて巣箱から顔を出すことが多くありました。けれどやっぱり夜行性のムササビにとって昼間は眠いのか、目は閉じたまま。季節が秋に近づくにつれ、巣立ちの時期がやってくると、ある日突然巣箱のなかは空になってしまいました。けれどその後も、数頭が巣箱にやってきては出て行ってを現在に至るまで繰り返しています。

私たちが過ごす毎日に、ムササビはどのように暮らしているのか。少しずつですが、観察を重ねることで分かったことが出てきました。観察といっても、特別大がかりなことをするわけでもありません。ただ、気が向いたときにライブカメラの映像を見てみる。気軽

な気持ちで楽しく観察しています。

今後も観察を続け、多くの人とムササビの生態を探っていきたいと思います。またムササビと出会う機会をつくりたいという思いから、毎年数回観察会を開催しています。日が暮れた青い空に、木々のあいだを黒いシルエットが滑空していく。その光景は、実に幻想的で美しいものです。もっと多くの人に関心をもってもらい、ムササビという魅力にあふれた生きものを知って、好きになってもらいたい。本年も、ムササビの魅力をたくさんの人に伝えるため、積極的に活動をおこないたいと思っています。

(かとう もえか・初等教育学科2年)



巣箱のなかのムササビ。子育て中の様子



キャンパスでムササビの観察会も開催しました



昼間に巣箱から身を乗り出すムササビ

☆キャンパスのムササビや自然の情報、フィールド・ミュージアム部門の活動などは、本学のホームページ (<http://www.tsuru.ac.jp/>) の「ムササビライブカメラ」のページでご覧になれます。

■研究・教育活動■

キャンパス周辺の身近な自然を、学生・市民とともに観察し、学びあう取り組みをしています。

環境ESDプログラム自然観察会

—観察会をおしてたくましく成長する学生たち—

■坂田有紀子

地域交流研究センターでは、本学独自の学科横断的カリキュラムである「環境ESDプログラム」の実習生を受け入れ、市民を対象とした自然観察会を年4回おこなっています。「身近な自然に親しみ、生きものたちの面白さや不思議を感じてみよう！」というテーマのもと、大学周辺の森のなかをハイキングしながら、四季折々に見られる身近な生きものたちを観察するというものです。定員20名の小さな観察会ですが、参加者は6歳から60歳代までと幅が広く、毎回楽しみに参加してくださるリピーターもいます。

さて、この観察会の最大の特徴は、学生が観察会の内容を企画し、準備、運営するところにあります。学生たちのほとんどは、とくに自然に詳しいわけでもなく、自然観察会に参加した経験もないという状態からスタートします。最初は下見を繰り返して、まず自分が「自然を知る」ところから始め、解説を担当する生きものやテーマを決め、調べ学習をします。その生きものについて一通り知識を得たら、次に本番でどのように解説するかを考えます。このように書くと、それほど難しいことではないように聞こえますが、多く



の学生にとって、それはとても大きなプレッシャーです。初めて見聞きするものばかりなのに、観察会では自分たちが説明をしなくてはならないわけですから。それでも何回か繰り返しているうちに学生たちは、どうすれば参加者に伝わるか、楽しい観察になるかを自ら考え工夫するようになります。そして学生らしい柔軟な発想で観察会を盛り上げていくようになります。もちろん毎回失敗や反省はありますが、参加者の皆さんが学生たちをとて温かく見守ってくださるので、学生たちは回を重ねるごとに自分の課題を克服し、多くのことを学んでいきます。時には参加者の皆さんから地域の歴史や暮らしの知恵などについて教えていただくこともあります。また子どもたちの方が、ある生きものについては良く知っている、ということもありません。

大切なのは図鑑やインターネットで得た知識を披露することではなく、「自分が自然の

なかで発見して本当に面白いと思ったこと、楽しかったこと」を参加者と（共有する）あるいは（学びあう）という姿勢です。本やTVでは得られない生きた自然体験を共有し、世代も立場も異なる人びとが互いに学びあう。そこには単なる自然観察を超えた、本来あるべき学びの姿があるような気がします。最後の観察会が終わった時の学生たちの自信に満ちたたくましい笑顔は学生たちの成長を如実に物語っています。

（さかた ゆきこ・本学初等教育学科教員）

学生スタッフの感想

坂田有紀子（社会学科 3年生）

今まで自然観察会を通して学んだことは、学ぶこととの面白さ、伝えることの難しさ、自分自身の成長である。一方通行の学びと相互に学びあう学びでは、吸収の仕方が大きく異なることが分かった。私たちスタッフは、情報を参加者に提供すると同時に私たちが自身知らない情報を参加者からもらうことが多々あった。観察会を通してお互いに学びを高めあえたとは感じた。もう一つは、年齢層の広い参加者たちにひとつの情報を伝えるとき、いかに分かりやすく、簡単すぎず難しすぎず伝えるかという点に頭を悩ませた。同じ情報でも伝え方によって受け取り方や、その人への影響の大きさも変わってくる。これらの問題に当たった時、なによりも、自分が伝えたいという気持ちを大切に、それを分かち合おうということが大切だと感じた。最後に一番感じるの

自分自身が成長できたということである。初めは人前で話すことも、知らない人と会話をすることも苦手でなかなか参加者の方がたと話すができずにいたが、観察会の数を増やしていくことに人とのコミュニケーションがとれるようになり、また、学びたい知りたいという気持ちが大きくなっていった。この実習は自分にとってなくてはならない経験になると感じた。実習に参加できて本当に良かった。

篠原 円香 (初等教育学科 3年生)

2年間のフィールド・ミュージアムでの実習を振り返ってみて、最初は自然に対する知識も人との上手な関わり方もなにも分からず、不安な気持ちが大きかったのですが、実際に始まるととても楽しかったです。おもに子ども対象のプログラムだったので、子どもが楽しんでくれたり、なにか一つでも心に残してくれたらいいなあと思ってプログラムに取り組んでいました。どうしたら伝わるのかを考え、画用紙に絵を描いたり写真を貼ったり、クイズを考えたり工夫しました。観察会だけでなく、その前後の準備や反省も充実していたなと思います。実習を通して自然に対する知識だけではなく、人との関わり方や自然に対する見方など多くのことを学びました。2年間本当に貴重な時間を過ごせたので、今までのことがいつかどこかで生かせるように頑張っていきたいと思います。

中田 匡彦 (初等教育学科 2年生)

今年の4回の自然観察会での活動は、自分にとって以下の点でもとても良い経験になりました。①地域

のかたと交流できた点、②自分だけでなく、参加者にとってもわかりやすい説明や構成を考えることができた点、③他者との協力・協働することの大切さを学べた点、の3点です。①について、自分はこの自然観察会に参加する前は、地域のかたと交流する機会がほとんどありませんでしたが、自然観察会に参加して多くの地域のかたと交流できたので良かったです。②について、自分たちで題材を決め、参加者のかたと説明するという経験が少なかつたため、他者にわかりやすく説明することの難しさを知りました。しかし、次第に参加者の目線に立って説明の方法などを考えられるようになったので良かったです。③について、自分は説明時や説明文を考えるさいに先生や班の人に助けられました。そのような多くの支え・協力のおかげで自分は、4回の自然観察会をやりきることができたと思います。自分一人で行なうことも大切ですが、他者と協力・協働することの大切さを身をもって知りました。

谷田 花織 (社会学科 3年生)

はじめは不安と同時に苦手だという意識が強かったが、計4回の観察会を通して、自分なりに成長することができたと感じている。参加者の方がたとのコミュニケーション、プログラムの進行、そして自然を対象とすることは本当に難しく、予想や期待通りにいかないことの方が多くて毎回反省と後悔が残ったが、それを実感できたことも勉強だったと思う。また、植物や動物はみるたびに違う景色をみせてくれるが、人も同様、同じものを観察してもその人によって感じることや発見することは違っていた。

た。この自然観察会ではそのような時間を共有することで、それぞれ得られるものがあつたのではないだろうか。また機会があればぜひ参加したいと思うし、都留の貴重な自然をいかして今後も続けていてほしいと考えた。



動物たちとふれあえる森づくり

■ 新田敏子

都留文科大學附属小学校は豊かな自然に恵まれた環境にあり、特色ある学校教育の一環として、総合的な学習の時間を使って4年生が校舎裏にある観察スペースにくる動物たちの観察と餌やりを行なっています。また、定期的に動物たちと出会うための施設のメンテナンスも行なっています。11月には、木材から児童が巣箱を作って学校に隣接する「ふれあいの森」にかけました。子どもたちは野鳥が来るのを楽しみに待っています。活動時には、都留文科大學の北垣憲仁先生を講師に迎え、身近な自然について学習を行なっています。今年度は以下のような取り組みを行ないました。

おもな活動内容

- うら山の散策—学校の裏山を散策し、どんな生きものがどのように生活しているかを知る。
- ヒミズの観察と装置メンテナンス—ヒミズを観察したり、観察スペースの維持管理や装置を整えたりする。
- リスの通り道のメンテナンス—リスや小動物が集まるえさ台や通り道を、スムーズに行き来できるように修理したり、整えたりする。
- クルミ拾い—観察スペースのえさ台には、週3日餌をおいている。リスの餌になるクルミを学校付近の山に行つて拾う。



- リスの観察—観察スペースに来るリスの観察や、えさ台の掃除などを行なう。
- 野鳥の巣箱作りと設置—裏山では年間を通していろいろな野鳥を見ることが出来る。野鳥の巣箱を児童が作つて裏山の木に設置したり、野鳥について学習したりする。
- ムササビ観察会—本校では、巣箱のなかから顔を出さずムササビを校舎内で見ることが出来る。夜行性のため、放課後保護者と一緒に「ムササビ観察会」を開いて巣箱に飛び移るムササビを観察する。

都留文科大學附属小学校の環境教育

■ 小口尚良

本校は、校舎と森が隣接し、窓から季節折々の森の景色、ムササビ、リス、ヒミズ、さまざまな野鳥を見ることが出来るという自然環境に恵まれた学校です。学校林も保有しており、これらを活用して1年生から6年生まで体系的な環境教育を行なっています。

平成26年度の活動

- 1年生—学校林散策、ネイチャーゲームなど
- 2年生—ふれあいの森散策、ネイチャーゲームなど
- 3年生—学校林散策、森の生きもの調べ
- 4年生—ふれあいの森 観察スペースの整備
動物観察 椎茸植菌
- 5年生—学校林で林業体験（枝打ち・間伐）
薪運び 椎茸植菌
- 6年生—学校林で植樹 下草刈り

- 学習発表会—1年間のうら山観察を行なった成果を、学習発表会の形で一人一人がテーマを決めて行なう。
- 3年生への引き継ぎ—4年生で行なう「うら山観察」を来年の4年生に引き継ぐための会を行なう。1年間の学習内容などを発表する。

これまではふれあいの森や学校林で身近な生きものとふれあう体験活動が中心でしたが、4年生では前記のように、自ら自然に働きかける活動を行ないました。人と生きものによりよい関係について考える素地づくりにつながる貴重な体験だと考えます。

（にった としこ・都留文科大學附属小学校4年教諭）

低学年では、都留文科大學の北垣先生、県ネイチャーゲーム協会のかたを講師に招き、自然体験学習を中心に進めています。高学年では、4年生が学校に隣接している「ふれあいの森」の一部につくられた動物たちと出会える観察スペースを整備し、動物観察を行なっています。また、林業の体験学習として、椎茸植菌（4・5年）、枝打ち・間伐（5年）、植樹・下草刈り（6年）も行なっています。

今年度は、5・6年教室に薪ストーブが入りました。これにより、森と教室がつながり、環境教育に広がり深まりができてきました。これまでの取り組みを生かして、今後、ESD（持続可能な開発のための教育）の視点を取り入れた環境教育を行なっていきたいと考えています

（おぐち ひさよし・都留文科大學附属小学校教諭）

■ 展示活動 ■

わたしたちの活動の成果を多くのかたがたと共有するために、富士急行線都留文科大前駅の駅舎を博物館の分館として展示活動をしています。本学の華道サークルのみなさんもここで、いけ花を展示しており、多くの人から好評をいただいています。

富士急行駅舎でのおもてなし

■ 遠藤桂花
■ 藤森春奈

私たち都留文科大華道サークルは、「自然を愛する心を育てる」をモットーに、現在大学構内の自然科学棟で、二週間に一回程のペースで活動を行なっています。富士急行線都留文科大前駅舎へのいけ花の展示は、七、八年前にサークルができた時からさせていただいている活動で、地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム構想の取り組みの一環でもある期待室の都留の自然を紹介するスペースにおいて、いけ花作品を飾らせていただいています。

都留のまちは自然に恵まれており、サークルとしても「花遣遥」(身のまわりの自然の草木を生かして楽しむこと)を心掛け、キャンパス内や楽山などでその季節に咲いているものをできるだけ使っていけています。大学構内にも作品の展示をさせていただいていますが、大学外で定期的に展示をさせていただく機会があるということは、私たち部員にとって地域のかたにも作品を見ていただく機会となり、日々の活動の励みになっています。

また、お花の水を替える様子を見に行った際に、「い

つも素敵なお花が飾ってあるのを楽しみにしているんです」といった言葉を地域のかたや駅を利用するかたにかけていただくこともあり、大変嬉しくありがたく思いますし、そのように少しでも喜んでいただければ幸いです。

花には癒しや気持ちを元気にする力があります。富士急の駅を訪れた人がほっと一息つくような空間にできるよう、また、都留文科大を訪れる時の玄関口でもある駅舎で、都留文科大のサークルとして「おもてなし」ができるよう、心を込めて作品をいけていきたいと思えます。作品は待合室のなかで飾らせていただいているため、待合室の外で待っているかたにも興味を持って楽しんでいただける、目を引く魅力的な作品をいけられるように、これからさらにサークル一同稽古に励みたいと思っております。

(えんどう けいか・国文学科4年
ふじもり はるな・英文学科4年)



駅舎内には、さまざまなパネルとともに華道サークルによるいけ花が展示されている (写真中央)



■地域の自然や生活の記憶を収集し、保存し、活用する■

わたしたちは、「地域の資料や記憶の保管庫」として、地域で過去に撮影された写真や生活の記憶、自然関連の資料などを収集、保存、活用する活動をしています。こうした活動では、都留市の「ミュージアム都留」と連携しています。

企画展「写真が伝える都留の思い出 —未来へ贈る地域の記憶—」を終えて

■森屋雅幸

本誌にて継続してご報告させていただいておりますように、都留文科大学地域交流研究センターとミュージアム都留では、市内の写真とそれにつながる記憶の収集と保存を進め、2015年2月現在までに2212点の写真を集めることができました。この場をお借りして感謝申し上げます。

さて、この事業の成果をお伝えしたく、平成26年3月22日から5月6日にかけてミュージアム都留にて企画展「写真が伝える都留の思い出—未来へ贈る地域の記憶—」を開催しました。会期中には約900名の皆様にご来館いただき、市内のみならず県内外からもお越しいただきました。ここでは、本企画展の内容と展示を終えた感想を中心にお話したいと思います。

本企画展では、収集された写真のうち約70枚を選定し、「街並みと自然の記憶」・「産業と建設の記憶」・「祭りと風習の記憶」・「生活と教育の記憶」・「市制周年記念事業を振り返る」のテーマでまとめて展示を行いました。展示ではおもに古写真と現在の写真を比較できるように写真を並べて配置しました。企画展開催の約1ヶ月前には山梨県は未曾有の雪害に見舞われた

ことから、この記憶も風化させないよう、雪害の写真と記憶を収集する特設コーナーを展示室内に設置し、来館者の皆様が撮影した写真や雪の日の記憶をお寄せいただきました。これは、副題にある「未来へ贈る地域の記憶」を意識したものであります。

また、会期中にも古写真をお寄せいただいた来館者のかたがたもいらっしやうって展示室の外に特設展示コーナーも設置しました。

関連イベントでは「つる桜マップ写真スライドショー」というカフェ形式のイベントを行ない、参加者の皆様に都留の桜の名所をご覧いただきました。また、「古写真の城下町を歩く」では、過去の写真を持参して、写真が撮影された場所の風景の移り変わりを参加者の皆様に実感していただきました。また、ゴールデンウィークには「箱カメラをつくろう」を開催し、原始的なカメラ作りを市内の小学生に体験していただきました。

この展示会や関連イベントを通じて、写



オープニングセレモニーでの
ギャラリートークの様子



「古写真の城下町を歩く」の様子

真の収集が順調に進んだということはもちろんですが、他にも今回の企画展のさまざまな場面で市民のかたがたにご協力いただけたと振り返ります。従来、資料を博物館に提供するというと、それは貴重で絢爛豪華な資料が想像されますが、写真という身近にあるものが資料になったことは、従来の博物館と市民のかたとの間の垣根が低くなったのではないかと考えました。また、写真を提供していただいたかたには写真のさまざまな思い出を聞き取らせていただきましたが、そうした聞き取りを通して、単に資料を提供いただくという手続きのなやりとりでなく、写真を通じたお話のなかで博物館と提供いただいたかたがたとの間でつながりを紡ぐことができたという実感があります。3月末からは今年度に入り収集した写真も合せた展示会を開催いたしますので、ぜひとも足をお運びいただければと思います。

(もりや まさゆき・都留市教育委員会
学びのまちづくり課 文化振興担当)

☆ミュージアム都留との連携事業として、「写真でたどる都留の時代—未来へつなぐ地域の記憶—」を、平成27年3月20日～5月6日までミュージアム都留で開催します。ぜひご覧ください。

山梨県都留市谷村地域のウォーキングトレイル 事業を対象とした風景・景観からの地域特性抽出

■ 相馬佑香

私は昨年、東京都市大学で「山梨県都留市谷村地域のウォーキングトレイル事業*を対象とした風景・景観からの地域特性抽出」というテーマのもと、景観の視点から研究を行ない、卒業論文の執筆をしました。なぜこのような研究を行なおうと思ったのかというと、現在、地域では人口減少、高齢化などの基本的構造の変化のみならず、景観の均質化による地域特性の喪失の問題が存在しています。このような危機的状況のなかで地域の良さとは？と考えたとき、ある国民意識調査について知りました。この調査によると1980年辺りから、「物の豊かさ」から「心の豊かさ」を重視する人が増え、幸福感や安心などへの関心が高まりつつあるとされています。私はこれだ、と思いました。豊かな自然資源、歴史・文化的資源を武器に、観光などの交流人口を呼び込み、経済成長から得られる幸福感とは別な幸福感を得ること、またウォーキングトレイル事業は、自動車による移動に依存しがちな地域社会に対し、住民の成人病予防や高齢者の健康維持に貢献する要素も大きいこと、このような地域性を評価し、都留市の良さを再認識していけたらと思いい、研究を行ないました。

住民と来訪者のかたがたの印象に残る風景の違いを分析したことに加え、都留文科大地域交流研究センターで所蔵されている対象地の過去（高度成長期前）の写真と現在の写真を見比べてもらい、9項目（①なつかしさ②歴史性③のどかさ④地域性⑤住みやすさ⑥安心感⑦豊かさ⑧ランドマーク性⑨総合）で評価、事業による開発で変化した要素について分析しました。結果として、地域住民は、自然が織り成す紅葉や山、田んぼなどの複合的な景観に高い評価を示しており、来訪者は、小水力発電施設や松尾芭蕉の句碑、神社の鳥居などの個別の景観要素の評価が高いことがわかりました。また、必ずしも新しく手を加えて空間を変えていくことが価値を下げていないことがわかりました。そのため、地方都市の場合、多くの自然が残されておき、すでにある資源が活用できる可能性が高く、歩道などの要素をどのように整備するかが今後の景観整備の鍵となると思います。今後、都留市の自然美が評価され、地域住民、来訪者にとって魅力ある景観として残され続けることを願います。

この研究を行なうにあたり、都留文科大地域交流研究センター・北垣憲仁先生、都留市教育委員会学びのまちづくり課・森屋雅幸様、ことぶき勸学院北都留教室のかたがた、都留市住民のかたがたにご協力いただきました。この場をお借りして深く感謝致します。

（そうま ゆか・東京都市大学平成25年度卒業生）



高度経済成長前に撮影された「家中川の石橋」
都留文科大地域交流研究センター所蔵



ウォーキングトレイルルート散策中

*都留市が平成16～19年度にかけて行なった「歩きたくなる城下町」をテーマとした谷村地区の文化財や市の施設を巡る遊歩道整備事業。

■地域の現代的な課題に取り組み■

都留は今も昔も自然ゆたかな場所です。しかしその一方で、カワラナデシコやカジカなどのように年々数が減ってきている生きものがあります。そうした絶滅が危惧される地域の生きものを保全するために、学生と教職員、地域の人が連携協力して、研究活動を行なっています。

カワラナデシコの保全活動をおして 生まれた地域交流

■坂田有紀子

都留文科大学初等教育学科の生物ゼミでは、都留市に自生するカワラナデシコの保全のための研究をおこなっています。カワラナデシコの研究を学生たちと始めて6年になりますが、研究を始めたきっかけは、自然科学棟事務室職員の志村千代子さんの言葉でした。「昔は都留市でも河原がピンク色に染まるくらいナデシコの花がたくさん咲いていたのに、最近はこちらとも見ない」と。

カワラナデシコと言えば、秋の七草の一つで、古来より和歌などに詠まれ日本人に親しまれてきた植物です。ピンク色の可憐な花と、しなやかで儂げな立ち姿は大和撫子の語源にもなっています。そのカワラナデシコが今では絶滅の危機に瀕していると知り、ふたたび河原がピンク色に染まるのを見てみたい、と思ったのがカワラナデシコとの付き合いの始まりでした。

最初は都留市内のカワラナデシコの分布調査から始まり、自生地内での個体群調査、環境条件と生長の関係、刈り取りなどの攪乱かくらんが生長や種子生産に与える影

響、訪花昆虫と種子生産の関係など、カワラナデシコの生態を知るためのさまざまな調査・実験をおこなってきました。その結果、カワラナデシコ本来の生息地である河原にはほとんどカワラナデシコがいないこと、適度な日照と肥料成分があると問題なく育つこと、小さなハエやハナバチの仲間が花粉媒介者として大事な役割をしていること、野外では種子がたくさんできていても生き残れるのはごくわずか(0.6%)であること、カワラナデシコの種子は冷蔵庫で5年間保管しても発芽すること、などがわかってきました。

昨年はこれらの研究成果を保全活動に活かすために、学生たちと「都留カワラナデシコマップ」というパンフレットを作成しました。このパンフレットは、地域のかたがたや子どもたちにカワラナデシコについて知ってもらうことを目的とし、都留市内のカワラナデシコの分布や栽培方法、受粉実験のやり方などを紹介しています。そして、なぜ昔は身近にいた生きものたちが減ってきているのか、地域の生きものを保全する

にはどうすればよいのかを考える、という構成になっています。私たちの次の目標は、都留市の小学校の子どもたちにカワラナデシコに興味をもってもらい、カワラナデシコを通して地域の自然に理解と愛着をもってもらうことです。学生たちが作成したパンフレットがそのお役に立てばこれほど嬉しいことはありません。

さて、この6年間、地域のかたがたにも大変お世話になりました。菅野川の近くにある三吉保育園の志村園長先生は、私たちがカワラナデシコの研究を始めた当初からのお付き合いになりますが、菅野川にわずかに自生していたカワラナデシコの種子を集め、保育園で園児とともに育て増やした株を菅野川に戻すという活動をおこなっています。またカワラナデシコの保全のための勉強会を開いた際には、三吉地域協働のまちづくり推進会の元会長の後藤敬さんが「都留の豊かな自然を後世に残すためなら」と奔走してくださいました。

鹿留川の自生地は都留で最も大きな群落でしたが、2011年9月の2度の超大型台風によって地面ごと流され、消滅してしまいました。幸い鹿留川の自生地由来の種子を研究用に保存していたので、その種子から育てた株を2014年3月に学生と一緒に鹿留川の土手に植栽しました。その半年後に様子を見に行つたときに驚いたのは、私たちが植えたカワラナデシコ以外にも、誰かが植えたと思われる株があったことです。おそらく近くの住民が、植えてくださったのだと想像しています。それが園芸品や他の自生地から持ち込まれたのではないことを願っていますが、何より、関心

をもってくれている市民がいることをとても嬉しく思った瞬間でした。

都留市城山の自生地は都留市では2番目に大きな群落でしたが、刈り払い機による一斉除草や崖崩れによる自生地の崩壊によってここ数年、少しずつ数を減らしてしまいました。そんな折、学生たちが城山のカワラナデシコの研究をしていることを知った都留市役所とシルバー人材センター、そして城山の麓に住む藤本絃一さんの協力により、カワラナデシコを残して除草がおこなわれるようになりました。特に藤本さんが夏に手鎌でカワラナデシコの周りの草を丁寧に刈ってくださいのおかげで、カワラナデシコの株数は100を超えるまでに回復しました。この他、多くの市民のかたがたからカワラナデシコの分布情報をいただいたり、学生たちに温かい励ましの声を掛けていただいています。

私は、地域の自然はその地域の住民（と生きものたち）のもので、地域の人びとが守るべきものだと思っています。しかしながら自然から離れた日常生活のなかで「自然を守る」といっても「何をすればいいのかわからない」という人が多いのが現実です。そのような、学生たちが地域に向き地域のなかで活動することは、日常のなかに「非日常」つまり新しい視点をもたらす効果があるのかもしれない。これまで当たり前だと思っていた自分たちの地域の良さや自然の価値を再認識することが「自然を守る」ための第一歩なのだろうと思います。他方、学生たちや教員である私も、地域の皆さんから昔ながらの「知恵」や自然の利用法など多くのことを学んでいます。大学に集積された「知」と、地域の自然や生活に根ざした昔ながら

の「知恵」。それらに、学生という「触媒」が加わることにより、地域が「活性化」されるのかもしれない。都留市の野原が再びピンク色に染まる日を夢見て…。

(さかた ゆきこ・本学初等教育学科教員)



城山のカワラナデシコ
遊歩道沿いに分布する。
都留市で現在、最大の群落



都留カワラナデシコマップ

無料で差し上げます。ご希望の方は都留文科大学自然科学棟0554-43-4341 (内615)までご連絡ください。

■地域を調べ、記録し、学びあおう■

わたしたちは、地域の自然や人びとの暮らしの知恵に学ぶことが大切だと考えています。そこで、現場に出かけ、ていねいに観察し、記録し、その成果を共有する活動をしています。その一つが、学生が主体となって編集し、発行する『フィールド・ノート』です。

機関誌『フィールド・ノート』の一年

■ 舟田早帆

『フィールド・ノート』では「都留の自然と人との交流」をテーマに、学生がそれぞれ都留で興味をもったことについて調べ、取材し記録を残しています。『フィールド・ノート』は年に4回発行です。各号、何を特集するかを編集部員同士話しあいで決定します。今年度は新入部員が5人加わり、新しい視点も増え、気持ち新たにスタートを切りました。

今年度最初に発行した81号の特集は、「挑戦者」です。なにかと新しいことがはじまる季節にそこへ挑んでいく勇気を誰かから分けてもらいたい、ということを決めた特集でした。

夏に発行した82号の特集は、「つどう」です。都留にあるさまざまなつどいを通して、なぜそこに人が集まるのか、そこに何があるのかを探りました。また、82号は表紙の写真が2枚の候補のうちからギリギリまで決まらないといった苦労もありました。ですがそのおかげで、インパクトのある冊子になったのではないかと思います。

夏季休暇を挟み、秋に発行したのが83号です。特集は「変化を見つめる―自然編―」でした。「変化」や「移り変わり」を取り上げてみたい、という話はこの号をはじめめる少し前から部員間で上がっていました。しかし「変化」と一言でいっても、自然も人も文化も、変

わり続けています。ありとあらゆるものが当てはまってしまうので、どうすればまとめられそうかと悩んでいました。そこで自然と文化の前後編に分けて特集することにしました。83号はその自然編ということ、都留の自然の移り変わりを細かく記録し、それを伝えていく号になりました。

そして今、わたしたちは84号の制作に取り掛かっています。84号の特集は「変化」の後編となる、文化編です。都留に遺る行事慣習、建物がどんな変化を遂げてきたのか。人から聞いた文献を当たったりとそれぞれの方法で都留の歴史を辿っています。

『フィールド・ノート』を発行するたび、読者のかたがたが感想を寄せてくださいます。自分たちの見たことや考えたことに対して何か反応をいただけるというのは本当に嬉しいことで、わたしも含めた編集部員全員の励みになっています。取材に協力してくださる都留の地域のかたや全国の読者のかた、『フィールド・ノート』は本当に多くのかたに支えられていることを実感します。感謝の気持ちを忘れずに、編集部一同これからも自分たちの考える都留の魅力を発信し共有していきたいと思っています。

(ふなだ さほ・社会学科環境・コミュニティ創造専攻2年)



取材から記事の作成まで約2ヶ月をかけ、全員で読みあい、完成まで何度も校正を繰り返します



年間4回、各号500部を発行する『フィールド・ノート』。県内外の多くの読者に励まされながら、冊子編集に取り組んでいます

『フィールド・ノート』の経験を活かす ——二冊の冊子の創刊——

■ 別符沙都樹

『フィールド・ノート』の卒業生で、卒業後みずからの手で雑誌を創刊し、活動しているかたたちがいらっしゃると思います。東京都葛飾区で活動する崎田史浩さん（2013年卒業）と、山梨県道志村で活動する香西恵さん（2013年卒業）です。崎田さんは葛飾で冊子を作りたいと声をかけをし、それに賛同した地域のかたたちと一緒に『ヨコガオ』作りの活動を立ち上げました。香西さんは道志村地域おこし協力隊の活動の一環として『道志手帖』を創刊しました。

以前『フィールド・ノート』83号に寄稿していただいた文章で、崎田さんは『ヨコガオ』創刊の経緯について、『フィールド・ノート』は、冊子にするまでの過程に濃い時間があります。部員同士の意見交換や取材を通しての人との交流、自分との対話。この経験を

通じて、身近な人や自然から学べることの尊さが刻まれていることもあり、この経験を葛飾の冊子でも得たいとの思いが強くなりました」と語っていらつしやいます。また、香西さんも、『道志手帖』No.6で「養蚕」を特集テーマにした理由について、ご自身が過去に『フィールド・ノート』で「養蚕の先生」に取材をしたことがきっかけだとおっしゃっています。その経験を通し、「いつか養蚕について存分に取り上げたい」と思っていた」とのことです。

お二人の活動に共通していることは、自分の住んでいる地域に目を向け取材をしていること、『フィール

ド・ノート』での活動を基盤として、さらにそれを卒業後も自分なりの方法で続けていらつしやることです。『フィールド・ノート』編集部は誰かに言われたことを受身になってやらされるのではなく、自分がやりたいこと、興味をもったことを記事にし、表現して記録します。『フィールド・ノート』の活動は、確実に自分の血となり肉となるでしょう。卒業を機にそういった冊子づくりから離れることもできますが、卒業を理由に活動を止めるのではなく、むしろ自分の方法で発展させ書き続けるといふ姿勢は眩しく、とても格好よく感じます。また、そのような続けたいと思えるような経験が、自分のなかにもまさに今、蓄積されつつあるのかな、と思うと楽しみでもあります。

（べっぴん さつき・国文学科3年）



崎田史浩さんが発行した『ヨコガオ』。2015年7月に第2号を発行予定



香西恵さんが発行した『道志手帖』。2015年2月現在、6号を発行。2015年2月末に第7号を発行予定

地域交流研究センターでは現在、「地域交流研究Ⅱ」、「地域交流研究Ⅲ」、「地域交流研究Ⅳ」という教養科目を開講しています。今年度の授業を振り返ります。

「地域交流研究Ⅱ」

—記録と向き合い、
言葉と向き合う時間—

■西 教生

地域交流研究Ⅱでは、2014年度も前期に「生きもの地図を作る」をテーマにして、身近に見られる生きものの分布調査をおこないました。調査対象は、大学周辺の12種の樹木、タンポポ、ツバメ、イワツバメ、スズメの5つです。受講生には興味のあるものをひとつ選んでもらい、グループにわかれて調査をしました。調査の結果をまとめ、最後にグループごとに1枚のパネルを作製します。作製したパネルは都留文科大学前駅の待合室に展示しました。

この授業は、野外に出て記録を取ることに重きを置いています。参考書やインターネットなどから広く知識を得ることも必要ですが、豊かな学びは自身の経験のなかにこそあると考えるからです。受講生のみならずには、身近な場所にも興味深い生きものの暮らしがあり、それを調べる楽しさも実感してもらいたいと思っています。

今年の調査からわかったことをいくつか挙げましょう。大学キャンパスとその周辺で12種の樹木を対象に

した調査から、100㎡あたりの種類数は「ムササビの森」が一番多い結果となりました。タンポポは5月上旬に満開の個体が、5月下旬には熟した実の個体もつと多くなりました。花茎かけいの長さの平均値は、12グループのすべてで満開よりも熟した実のほうが高い値を示しました。繁殖中のツバメの巣は、4グループでばらつきはあるものの、おおむね2回のピークがあることがわかりました。イワツバメの巣は、ツバメの巣のあった場所よりも狭い範囲に集中して分布していることが明らかになりました。スズメは6グループのほぼすべてで飛翔中の発見が多く、次いで電線に止まっている場合が多く、樹上はあまり利用されていませんでした。

調査、まとめ、パネル作製という一連の作業から、それぞれの生きものに親しみ、経験を通して学び、自分たちが取った記録からわかることを、多くの人に伝える。記録と向き合い、言葉と向き合う時間。受講生からは「自然に触れ合えるよい機会でした」、「フィールドワークが楽しく、またこういう授業があれば是非とりたい」という感想がありました。調査を重ねることで、身近な自然に対するまなざしに変化する様子も感じられました。受講生ひとりひとりの発見や驚きを大切にしなが、今後は得られた記録の効果的な活用方法を模索していこうと思います。

(にし のりお・「地域交流研究Ⅱ」担当、本学非常勤講師)



イワツバメの巣の調査風景



キャンパス内につくられたイワツバメの巣

〈講座〉

日程	テーマ	講師	備考
4月17日	開講式、山梨県の概要と観光振興	観光部職員	山梨県観光部
4月24日	山梨と富士山	白井 浩隆	ひめねずみ社
5月 8日	山梨の歴史	近藤 暁子	山梨県立博物館
5月15日	郡内織物の新しい挑戦	前田 市郎	甲斐絹座 (前田源商店) 取締役
5月22日	甲州印傳	上原 勇七	(株) 印傳屋上原 会長
5月29日	山梨の果実	堀内 圓	甲斐いちのみや金桜園 社長
6月 5日	地域活性	赤松 智志	富士吉田 地域おこし協力隊
6月12日	山梨のワイン	長谷部 賢	長谷部酒店勝沼食堂 Papasolotte
6月19日	山梨の方言「Can you speak 甲州弁?」	五緒川津平太	作家 (本名: 大堀 卓)
6月26日	都留市の魅力	依田 博江	都留市役所 産業観光課

〈フィールド・ワーク〉

日程	方面	視察先
5月31日	郡内地域	河口浅間神社、フジヤマ・ミュージアム、山梨県立富士ビジターセンター、山梨県富士山科学研究所、尾県郷土資料館
6月28日	国中地域	サントリー白州工場、道の駅「白州」、いちのみや金桜園、シャトー勝沼

「地域交流研究Ⅲ」
—「山梨」を知り
歩き、知らせる—

■ 杉本光司

この科目は、山梨県観光部における「やまなし観光カレッジ事業」との提携により、表に示すように、県

内各分野の第一線で活躍しているかたを講師に招いての10回の講座、土曜日開催の2回のフィールド・ワーク、そして1回以上のイベント・ボランティア参加という3つの要素から構成されています。

山梨県知事発行の修了認定証を受け取るためには、①7回以上の講座出席、②1回以上のフィールド・ワーク参加、③1回以上のイベント・ボランティア参加、④山梨県観光行政に対する提案レポート提出、という4つの条件をクリアしなければなりません。

今年度はこれまでにない受講者209名となっており、条件の一つ、フィールド・ワーク参加は、「どちらか一回」ということに変更して対応することになりました。また、授業開講時期が前期であるため、県内におけるイベント開催そのものが少ない時期にあたり、イベント・ボランティア参加は、授業終了後の夏休み、更には、11月の桂川祭への参加も認めて頂くことにしました。

結果的には、後期のイベント・ボランティア参加確認書の提出者が少なく、当初予定者を大幅に下回る97名が「やまなし観光カレッジ事業修了認定者」として登録されました。なお、開講時期や成績の仮認定評価の方法も含めて、来年度以後の課題が提示されました。平成27年1月27日(火)には、福田誠治学長、山梨県観光部職員、本学関係者の参加を頂き、「やまなし観光カレッジ」修了認定者97名に対して認定証授与式が開催されました。

(すぎもととてるじ・「地域交流研究Ⅲ」担当、本学情報センター教員)



五緒川津平太さんから「甲州弁」を学ぶ



世界遺産・富士山の構成資産の一つ河口浅間神社で学ぶ

「地域交流研究Ⅳ」

—「素直さ」—

■ 藤森明日香

私が受講した「地域交流研究Ⅳ」の授業は、都留市のなかで取材対象者を各々決め、実際に取材を行ない、それについて記事を書くというものでした。

記事を書くときに心がけたことは、「ありきたりな文章、ぼかした文章、きれいな文章は書かない。自分の素直な気持ちを書く」ということでした。

「本音で書く」と意識して書くことは、戸惑いの連続でした。ふだん建前で文章を書いていた私は「こんなことを書いていいのだろうか？（自分の気持ちを）書き過ぎたのだろうか？」と悩んだこともありましたが、授業のたびに受講生同士で校正を繰り返すことで、私も開き直ったような気持ちで書いてみました。

本音で書くことは、難しく、楽しく、そして書き終えたあとは非常に達成感を得られるものでした。自分の書いた文章を読んでも、少し照れくさい所もありますが、不思議と何度も読み返したくなります。また、他の受講生の書いた記事を読んでいると、とても心が躍り、文章を通して取材対象者の人柄、そして筆者の人柄が浮かんでくるのです。これは建前で文章を取り繕っていたならば、決してあり得ないことであつたと思います。素直に、誠実に文章を書いたからこそ読み手の心を打つものになっているのだと感じまし

た。

現在、建前が世の中に蔓延まんえんしているように思います。私を含め、形式ばって、取り繕って物事をやり過ぎそうとしているのです。確かに建前は物事を円滑に効率よく進めるためには大切ですが、それだけになってしまふと面白くありません。心にも届きません。これは文章に限らず対話においても同じことが言えるのではないのでしょうか。気取らず、背伸びせず、お互いが腹を割って話すことで、新しい人間関係が生まれてきます。

今後つねにどんな時も素直に文章を書く、誰とでも素直に話す、ということは不可能ですが、そうした気持ちだけは忘れずに生きていきたいと思えます。

（ふじもり あすか・初等教育学科4年）



取材先の料理店の様子
(撮影：藤森明日香)



地域の料理店をじっさいに訪ねて取材をし、記事にした

プロジェクト研究

田んぼの意義を広める

■ 西本勝美

この『通信』でも何度か紹介してきましたが、「田んぼクラブ」は大学近くの水田で、学生主体で稲作（米づくり）をしているサークル的な活動です。今年度で10周年を迎え、12月には記念イベントも開催されました。今年度の学生代表は、三代目になる社会学科の吉原南海くんです。吉原くんに活動を紹介してもらいました。

「大学に農学部があるわけではないのに、田んぼクラブははじめ多くの農業サークルが活動をしているのは、都留文科大大学ならではのと思っと思っています。そのなかでも、稲作をする田んぼクラブは珍しいサークルだと思います。田んぼクラブの良いところは、日本人の主食であるお米を栽培するところにあります。三食のどれかにご飯を食べることが多いですが、どのように作られているかを知る機会はなかなかありません。田んぼクラブは一年を通じて稲作を体験できます。それも、苗を作るところから精米をするところまで、学生中心でおこないます。そのため多くのことを学べます。また、田植えや稲刈りといった代表的な作業をはじめ、田んぼの作業は多くの人手を必要とします。そ

のため必然的に、人と人のつながりも深まります。今年度は、多くの作業に、田んぼクラブ以外の学生を招待し、作業を体験してもらおうことができました。田んぼの意義を広めることもできたと思います。さらに今年度は、苗が足りなくなった時に地域の農家のかたに分けていただいたり、脱穀でも大学の職員のかたに機械を貸していただいたりしました。そのため、学生以外の人たちとのつながりの大切さも実感することができました。」

今年度は、播種・育苗の時期が遅くなってしまったことが原因で、次々と難しい問題が起こりましたが、学生たちの知恵や人脈を活かして乗り切り、なんとか収穫にこぎ着けることができました。また、10年におたつて無農薬栽培を続けた結果、コナギという雑草が復活し、絶滅が危惧されるトノサマガエルが生育していることを、生物学や生態学の先生方に高く評価していただきました。今後は、こうした環境や生きものにも目を向けた取り組みを進めていきたいと考えています。田んぼの場所は、ウエルシア都留店の真向かいです。いつでも見に来てください。

（にしもとかつみ・本学初等教育学科教員）



大学の職員さんのご厚意で脱穀ができました



田植え。疎植一本植えです

谷二ラボ4年目

■山森美穂

地域交流センター通信24号で、初等教育学科化学ゼミが実施する「谷二ラボ」（＝谷村第二小学校で子どもたちと小学校教員を目指す大学生と一緒に理科実験をする活動）の平成24年度と25年度8月までの報告をさせていただきます。今回はその後の1年半の活動を報告します。

平成25年度第3回は、「すきまをとる水」と題し、うずら卵を酢につけて殻を溶かし「すけすけ卵」や「ぶよぶよ卵」などと呼ばれる薄皮だけに包まれた状態にしたものと、切り花に色水を吸い上げさせる実験を扱いました。後者は、申込用紙でやってみたい実験を募集したところ、挙がったテーマです。待ち時間が長くなるので、別の実験を組み合わせたい、ただし単なる二本立てではなく、と考えて選んだのが前者です。卵の薄皮（卵殻膜）は半透膜といって、水分子は通れるが水に溶けている水より大きな分子は通れない大きさの孔が空いています。「ぶよぶよ卵」を真水や食塩水につけて、膜を水が出入りすることで起きる変化を観察しました。

じつは切り花色水実験をリクエストしてくれたお子さんが、当日欠席で参加できませんでした。それもあって、「花に色水を吸わせてみよう」だけに絞って第4回として行なうことになりました。この回は花の種類を増やし、同じ長さに揃えた花を時間差をつけて色水に

入れて並べる展示的な設定もするなどの工夫をしました。

平成26年度第1回は、人工イクラ作りとして有名な実験を、「イクラ」の中身を果汁100%ジュースにして、家庭科室で実施しました。本番では、乳酸カルシウム水溶液につけたままの時間が長くなり過ぎたせいで、皮部分が硬くなってしまう、試食タイムでは大勢が微妙な表情でした。この回は持ち帰り用に小分け材料を用意していて、本当によかったです。本学職員のお子さん（2年生K君）が参加してくれたので、自宅での実験の様子をお聞きすることができました。K君は谷二ラボで説明したことをちゃんと理解し、家族に説明しながら実施。お母さんも「やり方を知っているのはあなただけなのだから」と盛り上げてくださって、もちろん大成功！材料を持ち帰りできるテーマ以外の回でも、家庭で話題にしやすいうように、ワークショップの文言を学生たちと検討しました。

第2回は紫外線下で発色する絵の具を使った実験、第3回は「サインペンの色をわけてみよう！」を行ないました。いずれも、化学ゼミ生十助っ人の学生が、進行やガイドを務めました。発行時まで、第4回を実施予定です。参加してくれたみなさん、ありがとうございました。

（やまもり みほ・本学初等教育学科教員）



サインペンの色がきれいにわかれまして！
（平成26年度第3回）



スポイトで1滴ずつ、コップ内の溶液に入れます
（平成26年度第1回）

初めての食育教室

■平 和香子

初等教育学科生活環境科学系(家庭科)ゼミ15名は、昨年12月にさくら保育園(田野倉)において、初めての食育教室を行いました。

この教室を実施することになったのは、都留市が平成25年から策定している「新食育つる推進プラン」に基づき、ゼミ生たちが乳幼児を対象とした、具体的な食育活動を考えたことがきっかけでした。また偶然にも、本ゼミ3年生井上正士君の御自宅がさくら保育園であることから、井上君の祖母様である安藤圭子園長先生に相談し、本活動についての理解をいただくことができました。

保育園は、対象年齢が0〜6歳と幅広いことから、当日はパネルシアターと簡単な演劇をミックスした食育劇を行なうこととなりました。学生たちは手作り感にこだわり、脚本、劇中歌、大道具、小道具、衣装に至るまで、全て自分たちで作り上げ、当日を迎えました。じつさいの様子は、学生たちの感想と写真を参照下さい。当初は、保育園の皆さんよりも学生たちの方が遥かに緊張していた様子でしたが、劇が始まるにつれ園児の皆さんの反応も大きくなり、最後はお互い笑顔が溢れ、園児と学生と一緒に大きな声で歌い踊り、とても盛り上がりました。

学生たちは、普段なかなか接することのできない、乳幼児期のお子さんたちと関わる貴重な経験を頂戴す

ることができたことで、食育に対する大きな意識変化が生まれているようです。このような点からも、今回の活動を通じ、大切な乳幼児期の子どもに寄り添い、さまざまな視点から考えるチャンスをいただけたことを、大変ありがたく感じております。

ここに改めまして、さくら保育園の安藤 圭子園長先生、教職員の皆様、そして、とても明るく元気で可愛い園児の皆さんに、心より厚く御礼申し上げます。

最後に、本教室は、「食育つる推進市民会議」における取り組みの一環として活動させていただきました。また、今年度の活動は都留文科大特別教育研究費の助成を受けました。ここに併せて感謝致します。

(たいら わかこ・本学初等教育学科教員)

貴重な経験

西室和美にしむろみづみ (初等教育学科4年)

初めての食育実践で不安も多くありましたが、予想以上に子どもたちの反応が良く、子どもたちが喜んでいる姿を見ることができてよかったです。何をすれば子どもたちに伝わるのか、食への興味関心が高まるのか、など効果的な食育の方法を考えることが大変でしたが、貴重な経験をすることができました。これをきっかけに、保育園と大学が連携して食育を推進していける機会になればいいと思います。



元気いっぱい、さくら保育園のみんなと一緒に



さあ、みんなで一緒に呪文を唱えてね!

平成26年度子ども公開講座(陸上教室)

麻場一徳

していきけるように工夫して行ないました。

平成26年8月18日、子ども公開講座のなかの一講座として、「陸上教室」楽しく走ろう！Run・Run・ラン！」を開催しました。とても暑い時期にもかかわらず、都留市内の小

学生27名が参加してくれました。当日は天気心配もあり、当初実施予定のやまびこ競技場から本学体育館へ場所を移して行ないました。

参加者を低学年(1～3年生)グループと高学年(4～6年生)グループの2つに分け、それぞれの発達段階に合わせたメニューで走り方の練習を行ないました。メニューの内容については、低学年では鬼ごっこ、いろいろなスキップ

(普通のスキップだけでなく、大股で行ったり、小股で行ったり、横を向いたり、後ろを向いたり、手をつなぐなど、いろいろなバリエーションのスキップ)、マーク走(一步一步の歩幅に合わせた目印(マーク)を置き、それをまたぐようにして走る練習)などを行ない、走るという単調な運動を飽きることなく、楽しく行

なえるように工夫しました。一方高学年では、いろいろなスキップ、マーク走に加え、変形ダッシュ(座ったり、寝転んだり、腕立て姿勢をとるなど、いろいろな姿勢から走り出すダッシュ)を行ない、楽しく走りながらも走る技術を習得

属する3年生と4年生が、それぞれのグループに2名ずつ担当して行ないました。また、本学の卒業生で大月市立七保小学校に勤めながら現役選手を続けている松山文奈さんも応援に駆けつけてくれて、とても賑やかな教室となりました。

参加者からは、「へんなしせいからスタートするのがおもしろかった。」(5年・男)、「スキップが楽しかった。」(5年・女、3年・女、1年・男)、「コーンを置いて走るやつが楽しかった。」(4年・男)、「また来たいです。」(4年・女、1年・女)などの感想が寄せられ、好評のうちに終わることができました。

参加者の皆さんがとても楽しそうに取り組む、また走り方がみるみるうちに上達していく姿をみて、指導陣も楽しいだけでなく、充実感を覚えることができました。将来教師を目指すゼミの学生にとつてはとても勉強になるひとときでもあったと思われれます。

(あさば かずのり・本学初等教育学科教員)



子どもが本気になる授業づくり

日時：平成26年7月24日(木)～7月25日(金)
場所：都留文科大学 2号館 202 教室

【第一日目】7月24日(木)

午前 9:30～ 午前 9:45	受 講 受 付 (2号館)
午前 9:45～ 午前10:00	『講座の趣旨について』 説明：杉本光司(地域交流研究センター長)
午前10:00～ 正 午	『子ども理解と学習指導』 講師：山崎隆夫(本学非常勤講師) 内容：子どもに寄り添い、支えるとはどういうことなのかを考えるとともに、その手立ての中心となるべき学習指導のあり方を実践的に検討します。
午後 1:00～ 午後 3:00	『学習意欲を引き出す学びづくり』－社会科教育を通して－ 講師：田所恭介(本学非常勤講師) 内容：暗記科目と言われがちな社会科ですが、子どもの瞳が輝くような学びをどうしたらつくり出せるのかを、具体的な教材を通して考えます。

【第二日目】7月25日(金)

午前 9:45～ 午前10:00	受 講 受 付 (2号館)
午前10:00～ 正 午	『教科に関する研究講座Ⅰ』－子どもがわかる授業を作る・理科－ 講師：平野耕一(本学准教授) 内容：実験キット等ではなく、身の回りにある道具を用いて手軽にでき、生徒の興味を引くような、有効な実験の方法を多数ご紹介します。
午後 1:00～ 午後 3:00	『教科に関する研究講座Ⅱ』－算数を楽しむ授業をつくる－ 講師：岡野恵司(本学講師) 内容：本講座では、身近なものを使って、生徒に算数のおもしろさを伝える話題を紹介し、その中にある数学的意味を考えます。

平成26年度 都留文科大学現職教員教育講座 テーマ・教師の子ども理解と学習指導

遠山佳代子

今年度は、十年目研修の一環で、都留文科大学の現職教員教育講座に参加させていただきました。教員になって、十三年目になりましたが、いつも頭を悩ますのが、どうしたら子どもたちが主体的に学習できるのかということです。今回の講義は、私の日々の悩みに示唆を与えていただけのものでした。

田所先生の講義では、どのようにして、子どもたちの興味関心、知りたい・わかりたいという気持ちを高められるかを学ぶことができました。実物を見せることの大切さ、同じことを教えるにも、導入でどれだけインパクトのあるものを準備するか。その教材研究と、クラスの子どもたちが何に興味を示すかを判断する、児童理解が大切だということがわかりました。ただ、すべての授業をそのように行なうことはとても難しいです。まずは、自分の専門性を生かした授業をどのように組み立てるかを考えることが重要であることがわかりました。

また、実際に自分たちが子どもの立場になって考えることによって見えてくるものがありました。初めてお会いする他校の先生方と一緒に考えたり、発表したりするなかで、和気あいあいと研修を進めることができました。子どもが「楽しい」と思える授業は、やはり「わかる授業」「興味・関心がある授業」だということを改めて感じさせられました。

山崎先生のお話を聞き、個に応じたきめ細やかな愛のある言葉かけ。学級通信の内容の大切さを学びました。児童も保護者も多様化するなかで、ただあったことを伝えるのではなく、子ども一人ひとりの成長や、学級での子どもたちの葛藤、保護者へのメッセージを明確に伝えていくツールであることを、実物を見て体感しました。また、「子どもには知識や愛情を与えれば与えただけ教師に喜びが返ってくる」という言葉がとても印象に残りました。

今、目の前にいる子どもたちをどう変えていくか、それが教師の一番の仕事だと思えます。今回学んだことに自分らしさを加えながら、明日への授業・児童理解に役立てていきたいと思えます。来年も日程を調整して、ぜひ参加してみたいです。

(とおやま かよこ・道志小学校教諭)



第17回「南都留地域教育フォーラム」を終えて

小俣義一

平成26年10月31日(金)、富士吉田市立下吉田第二小学校において「南都留地域教育フォーラム」が開催されました。南都留地域教育推進連絡協議会および山梨県富士・東部教育事務所が主催となり、今年度は200を超える所属団体から約320名の方々のご参加をいただき、「子どもたちの教育は地域全体で担う」～みんなで育む地域連携・地域交流～」をテーマに熱い議論が交わされました。

このフォーラムは、「21世紀を担う子どもたちが健全に育ち、人間として調和のとれた成長を遂げるにはどうすれば良いのか、地域ぐるみで議論を重ね、みんなで考える」ことをその目的におき、平成10年度からはじまり、今年度で17回を数えます。7つの分科会では、幼・保・小・中・高・支援学校・行政・地域団体・PTAなど、さまざまな立場から連携・交流活動の実践報告が行なわれ、互いに日頃の活動を理解し合い、発展的・建設的な意見を交わす機会となりました。また、都留文科大学をはじめ大学の先生がたには、助言者として専門家の立場から問題解決に向けての方向性を示していただき、より一層議論を深めることができました。

また、分科会に先立ち全体会で行なわれたアトラクション「光っ子コンサート」では、山中湖中学校ジャズバンド部「BLUE LAKE BEAT」による演奏が披露され、そのすばらしいパフォーマンス

スに会場全体が感動に包まれました。同部は、「ジュニアバンドフェスティバル」においてグランプリを受賞するなど、バンド結成以来、多くの賞を受賞するとともに、地域のイベントや近隣の学校との交歓会など幅広く活動しています。演奏技術の向上のみならず、地域の文化水準の向上に努めながら楽しく演奏する子どもたちに、教育の原点である生きがいや喜びを感じることができました。

子どもたちを取り巻く今日の教育課題の解決には、まず、諸問題を知り、問題意識をお互いに共有することが大切であり、学校・家庭・地域の交流をより一層深め、お互いの活動を理解し、連携して共に考えていくことが必要です。まさしくこのフォーラムの根本理念がここにあり、今後も地域の各団体・関係機関が同じ方向性をもって、そ

れぞれの立場で意見を交換し議論を重ね、諸問題の解決に向けて共に歩んでいくことができればと考えます。

(おまた よしいち・富士・東部教育事務所
地域教育支援スタッフ主幹)

平成26年度 山梨県南都留地域教育フォーラム 分科会テーマ・助言者等一覧表

実施日10月31日(金)

分科会	部会テーマ	本学の助言者
第1分科会	滑らかな接続のために	筒井潤子
第2分科会	学校間連携	品田笑子
第3分科会	地域がフィールド	西本勝美
第4分科会	つなげて膨らめる	亀田孝夫
第5分科会	未来へつなぐ地域の力	金山光一
第6分科会	わかり合い、高め合う	
第7分科会	子どもを守る	



第1分科会の様子



アトラクション「光っ子コンサート」 山中湖中学校
ジャズバンド部「BLUE LAKE BEAT」による演奏

学級づくりの向上をめざす実践講座を振り返って

鶴田清司

第1回	4月26日(土)	渡辺幸之助 (勝山中学校)	学級担任の夢と理想～人間性の「回復」と可能性の目覚め～
第2回	5月24日(土)	杉本賢二 (富士・東部教育事務所)	急務! 「学級づくり」こそ学力向上のキーワード
第3回	6月28日(土)	鈴木輝英 (東桂小学校)	小中連携で学級の力をどう伸ばし、可能性をどう広げるか
第4回	7月26日(土)	原 喜雄 (加納岩小学校)	学校経営として取り組む学級力向上プログラム
第5回	9月27日(土)	芦沢稔也 (増穂中学校)	学習意欲・学習習慣を支える学級づくり～自主学習ノートの取り組みを中心に～
第6回	10月25日(土)	秋山俊哉 (韮崎中学校)	特別支援教育から培った生徒理解を学級づくりに生かす～思春期の荒れを理解する手だてとして～
第7回	11月22日(土)	梶原宣仁 (石和北小学校)	授業づくりが学級集団の基盤をつくる

学級づくりの重要性が叫ばれるわりには、その具体的な方法については学ぶ機会が少ないという現状をふまえて、平成24年度から本講座がスタートしました。私が代表を務める「都留ことばの会」と地域交流研究センターとの共催です。

毎回、県内の学級づくりの達人と言われる先生方が、ご自分の実践の事実をもとに具体的に子どもたちの様子やその変化を語って下さるのが最大の魅力です。

また、都留文大の学生にとっては、さまざまな問題をめぐって現職の先生がたと率直に語り合うことができるという点でも貴重な学びの場になっています。

平成26年度は7回にわたって開催されました。参加者はのべ129名でした。

つぎに、参加者の感想をいくつか紹介します。

・将来教師になったときに、芦沢先生のように変化・変容を見とれるようになりたいと思いました。そのために日々の学習や生活の様子を文章で振り返らせるような取り組みをしていきたいと思いました。(専攻科1年)

・学級において、所属意識をもつということが子どもにとって、とても大事だと思いました。そのためには全体ではなく、小集団・班活動を通して、他者と人間関係を築いたり、自分の役割をもたせたりすることが効果的だと思いました。ぜひ班活動を中心とした学級経営を実践してみたいです。(大学4年)

・学校でちょうど今、家庭学習の定着をはかるうとしていた最中だったので、非常に勉強になりました。生徒自身やみくもにワークや漢字練習をやっていたので、自主学習の仕方が分からなかったのだと思いました。やり方、効果を提示することで、やる気にもつながっていきなさいと思います。(教職1年目(中学

校)

・学級のなかでのルールづくりをどのようにするのか。また、班のなかでの人間関係づくりをしていく方法、給食や掃除についての目的をもった指導をこれからの学級づくりに生かしていきたいと思います。(教職6年目(小学校))

・最近ちょっとつづつになりかけていた自分に、明るい光を見出させてくれました。人は必ず良くなりたいたい、成長したいと思っていることを信じて、また明日から一歩ずつ積み上げていこうと思います(教職33年目(小学校))

今年度も講話終了後に座談会を設けることができました。今後も参加者の悩み・質問に答える時間をつくるようにしていきたいと思っています。

来年度も開催予定です。どうぞ奮ってご参加下さい。

(つるだ せいじ・本学初等教育学科教員)



第2回の杉本先生の講座

シンガポールの学生との交流

学生と市民が「ボランティア」をとおして集うことを目的に都留市社会福祉協議会との連携により「ボランティアひろば」が開かれたのは平成20年5月でした。

今回は、この地域貢献活動に注目し、協力要請いただいた本学の国際交流センターにおける事業の一つとして、シンガポールの学生との「ボランティア」をキーワードとした交流活動が本学で開催されました。当日は、多彩なボランティア活動に参加している学生たちの報告を中心に活発な交流の場が開かれました。



「ボランティア」をキーワードとした交流

昨年6月27日（金）シンガポールの大学生23名を都留文科大にお迎えし、本学学生と交流しました。

この事業は、外務省主催アジア大洋州地域交流事業（JENESYS 2.0）の一環として、公益社団法人青年海外協力協会（JOCA）からの依頼を受けて実施されたものです。JENESYS 2.0 招聘プログラムは毎回テーマが設定されています。今回は「市民社会活動」をテーマに市民や学生と交流、ホームステイを含む1泊2日の都留体験でした。

都留文科大は2013年「国際交流センター」をスタートさせ、それまでの国際交流事業をさらに拡大・充実させていくこととなりました。留学・国際交流室は学生の留学支援、海外協定校への学生派遣、短期研修実施、海外からの留学生受け入れ・支援などを主な仕事としています。JENESYS2.0への協力は2回目です。2013年10月にはパプア・ニューギニアからの学生をお迎えしました。

今回JOCAの担当者の方は、本学ホームページに掲載されている「ボランティア広場」に注目され、都留文科大に協力を要請してきました。「若者のボランティア活動」をテーマに意見交換をしたい、とのことでした。さっそく、「地域交流研究センター長」の杉本光

滝口肇子



司先生にお願いしてボランティア活動をしている学生団体をご紹介いただきました。私は大学で日々学生たちと接触していますが、恥ずかしながら学生がこんなにいるいろいろな活動をしているとは、「ボランティア広場」のミーティングに参加するまで知りませんでした。皆さん真剣に活動報告している姿を見て大変のもしく感じました。

当日は、シンガポールの皆さんにまず日本の学食を体験していただきました。定番のから揚げ定食ですが、今回は数名の方がベジタリアン食、ハラル食を希望していましたので、事前に学食と打ち合わせておきました。午後の交流は、日本文化体験、ボランティア活動



内容発表、意見交換、と大きく3つの流れを作りました。シンガポールの学生と本学の学生を一緒にして6つのグループを作り、グループ内での対話ができるようにしました。

文化体験では「華道」「書道」「茶道」「伝統的な遊び」のブースを設け、それぞれの部活・サークルに所属する学生たちに指導してもらいながら、わいわい楽しく盛り上がりました。「遊び」コーナーでは折り紙やけん玉に加え、百人一首についても学びました。

ボランティア活動に関する発表では、本学から「いこいのひろば」「ささなみ」「WORK WAKU都留」「VS(バーサス)」「おたすけ隊」の皆さんが発表してくれました。雪のないシンガポールの学生たちにとっては、昨年の大雪の時に大活躍した「VS」の発表は印象的だったようです。

シンガポールの学生たちからは自国についての紹介、それぞれの学生が参加するボランティア活動についての発表がありました。日本と同様、シンガポールでも高齢化社会が問題となっており、高齢者へのさまざまなサービス提供がボランティアの課題でもあるとのことでした。

今回の交流を通して、2つの国の学生たちが楽しい時間を共有できたことと思います。互いの文化、歴史に触れ、時間を共有しあうことで、少しでも互いの距離が縮まり、参加者の心の世界が広がったのではないかな、と思います。今回は「ボランティア」でしたが、これからも1つのキーワードを通して、国を超えた意見・情報交換が続いていくと思います。

(たぎぐち みねこ・本学国際交流センター
留学・国際交流室)



都留文科大学フィールド・ミュージアムを訪問して

法政大学からのセンター視察

須田英一

法政大学多摩地域交流センターに、団地再生、再生可能エネルギー、キャンパス・ミュージアムという三大プロジェクトが立ち上げられたのは2014年春のことです。そのうちキャンパス・ミュージアムについて、エコミュージアムを専門とする現代福祉学部の馬場憲一教授に検討が委嘱され、地域全体を博物館と捉える「法政大学多摩キャンパス・地域丸ごとミュージアム（仮称）」の設立に向け、第一段階としてその実現の可能性を探るため、フィールド・ミュージアム活動を展開している都留文科大学を訪れ、先進的な活動内容を実地で勉強することになりました。馬場先生をはじめとするメンバーが訪問したのは4月のことです。

都留文科大学のフィールド・ミュージアム構想は、30年という非常に長い実践の歴史を有しています。2003年には地域交流研究センターが発足し、フィールド・ミュージアム部門がそうした基盤の上に設立され、フィールド・ミュージアム構想が大学の教育内容に組織的に位置付けられることになりました。フィールド



としては、おもに富士山麓、桂川（相模川）流域

に注目した活動が行なわれています。フィールド・ミュージアム部門の機関誌として『フィールド・ノート』が刊行されて、80号を迎えていました。トータルで何と4000ページを数え、住民の5分の1に当たる方に取材をし、関わった学生は延べ140名になったと言います。編集・刊行は学生が主体となり、「地域交流研究Ⅳ」という授業で冊子作りが実施されています。スタッフとして特任教員1名、兼担教員2名、事務職員2名が配置されているとのことでしたが、地域を良く知った情熱をもった事務職員の存在が重要であると感じました。こうした縁の下の力持ちなしでは、事業は展開していかないことでしょう。

このように、フィールド・ミュージアムの成果が授業に活かされていること、地域交流研究センターが組織的な基盤となつていること、特任教員や事務職員が配置されていることなど、私たちが考える「法政大学多摩キャンパス・地域丸ごとミュージアム（仮称）」のお手本となることの多さに感心することは、この訪問となりました。また、フィールドとして

（すだ えいいち・法政大学現代福祉学部兼任講師）

法政大学多摩地域交流センター — 地域まるごとキャンパス —

法政大学多摩地域交流センター
(HUCC)

HP : <http://hucc.hosei.ac.jp>
facebook :
<https://www.facebook.com/hucc.hosei>

「法政大学多摩地域交流センター」(HUCC)は、地域と大学の交流・連携を深め、強めるために2013年4月に開設されました。「地域まるごとキャンパス」をコンセプトに近隣地域の各種活動や課題解決に参加することで、学生のキャリア形成をはかっています。現在、多摩地域交流センターでは、ゼミやサークルでの地域活動の支援、地域情報の収集・告知、大学イベントの地域への告知、「HUCC助成金プロジェクト」、「地域向けオープンキャンパス」、「多摩地域形成論」（多摩キャンパス4学部公開科目）、「多摩地域交流DAY」（2015年1月）などを実施しています。



インクルーシブなまちづくりへ向けて

文大名画座『幸せの太鼓を響かせて〜INCLUSION〜』 に込めたメッセージ

堤 英俊

次にその学生たちの感想を紹介します。(いずれも初等教育学科3年)

木村有里「考えるきっかけを届ける」

今回、聞いてくださる人が、何かを考えるきっかけになったり、私たち大学生が何を考えて向き合っているのかを感じていただければと思います。計画しました。来てくださった皆さんに何かしらを訴えることができていたとしたら嬉しいです。そして、多くのかたがあの映画から心動かされるものがあつたとしたら嬉しいいです。

永田咲「勇気をくれた太鼓の響き」

今回、この映画で、働くことや仕事をするということについて改めて考えなおすことができました。自分自身、今年が就活ということもあり、将来についてとても不安だったときにこの映画と出会い、やりたいことを仕事にできることや家族のために一生懸命働く姿をみて、私も頑張りたいと勇気をもらえました。

三浦悠「働くって何だろう?」

今回の映画は、一見サクセスストーリーに見えるかもしれませんが、それまでにはたくさん周りのサポートがあり、自分の強い意志がありと、その両者が折り重なっていた映画だった

2014年度の文大名画座を1月31日(土) 13時30分〜16時に2号館101教室において開催しました。今回は、知的障がいのあるプロの和太鼓集団「瑞宝太鼓」のメンバーたちが家族や地域(長崎県雲仙市瑞穂町)とともに生活する姿を映し出したドキュメンタリー映画『幸せの太鼓を響かせて〜INCLUSION〜』を上映しました。前日に積雪があつたこともあつて、開催自体が危ぶまれましたが、蓋を開けてみれば、160名近くのかたに足を運んでいただくことができ、盛会に終えることができました。そして、郡内地域の教育・福祉関係のみなさま(当時者を含む)にも多数ご参加いただくことができました。

上映前には、初等教育学科の堤ゼミ(障害児教育臨床ゼミ3年)の学生3名から「やりたいことを仕事にすること」に関して問題提起がなされ、私の方からは、映画のサブタイトルにある「インクルージョン」の説明とともに、自らの日常や地域のレベルでインクルージョンを具体的に考えていくことの重要性についてレクチャーを行ないました。事前に学生3名は静岡、私は埼玉の自主上映会(および「瑞宝太鼓」の公演)に参加し、そこで直に感じたこと・考えたことを持ち寄って今回の前座の構成を考えました。

と思います。今回、幅広い世代のかたがたに上映会に来ていただきとてもうれしく思いました。

今回の名画座は、「郡内地域で協働してインクルーシブなまちづくりを進めていきましょう」というメッセージを込めた企画でした。地域にねぞす公立大学として、みなさまとパートナー関係を結びながら、未来志向の文化活動を模索していかたいと思います。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

(つつみ ひでとし・本学初等教育学科教員)



文大名画座の様子



学生による問題提起

子どもたちの世界に学ぶ

都留市放課後子ども教室

高村直暉

私は地域交流研究センターが支援する都留市放

課後子ども教室の学生スタッフとして、流木や石を使つての工作、自由あそびに参加しました。すべての活動を通して、子ども教室に参加している子どもたちが、自分から率先して何かをしている姿や、ひとつのあそびに集中して取り組む姿が強く印象に残っています。子ども教室という場所は子どもたちにとって、少しだけ溜まっているモヤモヤを取り払えるような場所だったのでないかと感じました。活動に参加して改めてコーディネーターのかたがたの事前の準備やはたらきかけによって、子どもたちが本当に楽しめる場所が作り出されているのだと感じ、私自身が行なう実践活動のためにも大変参考になりました。

流木を使つての工作では、工作に使用するための流木や河原の石を拾うために川に入る予定だったのですが、当日の暑さときれいな川の水で全員がとても盛り上がり、中には全身びしょ濡れで戻る子がいるほど都留市の自然に触れることができました。参加した子どもたちに「ふだん川に入ったりするの？」と聞くと「こんなには入らない！」と言ってくれて、大人だけでなく、子どもたちにとっても思い出に残る日になったのではないかと感じました。また、工作では私が今まで見たことのないような作品がズラリと並び、子どもたちの

発想力、想像力の豊かさに圧倒されました。同じ内容を3か所で行ないました。どこもたくさんの方があり、すべてが違う内容だったかのような気持ちになることができました。

自由あそびでは、谷村第二小学校のグラウンドで自由にあそぶという内容でしたが、本当にたくさんの方のことを考え、吸収できた日となりました。私がふだん子どもたちとあそぶ時は、あらかじめあそびの内容やルールを決めて行なうことが多い、この日はコーディネーターのかたから「自由にあそんでいい」とだけ言われ、若干不安がありました。しかし、そんな不安を吹き飛ばしてくれた楽しい、わくわくするあそびを子どもたちが提案してくれて安心するとともに、自分が小学生の頃はただグラウンドに出て走り回るだけでわくわくして、楽しかったことを思い出すことができました。今後子どもたちと楽しくあそぶにはどうしたらよいのかを考えながら子どもたちと活動していきたいです。

放課後子ども教室での活動を通して、改めて子どもたちの世界のすごさを感じさせられました。また、私たち大人もたくさんの方のことを学ぶことができる機会だと感じました。来年度もまた募集があれば是非参加させていただきたいと思えます。

(たかむら なおき・初等教育学科2年)



～韓国社会の過去・現在・未来を探る～

県民コミュニティーカレッジ 映画から見る韓国事情

加藤敦子

10月18日、25日の二日間、大学コンソーシアムやまなしと本学地域交流研究センター共催の「県民コミュニティーカレッジ講座」が開催されました。嫌韓本の出版やヘイトスピーチの横行が問題となっている今だからこそ「韓国」をテーマにしたいという企画意図から、大学教員として7年間韓国に暮らした経験をもつ加藤敦子が「映画から見る韓国事情」全4回の講師を務めました。

第一回は「現代韓国若者事情」と題して整形手術と英語教育を取り上げました。どちらも日本では誇張された情報をもとに揶揄されがちですが、韓国の若者にとっては就職に直結する現実的な問題です。求職者を対象とした整形手術への意識調査や英語力のデータをふまえ、映画のリアルな描写を通して日本と異なる評価基準をもつ韓国の現状を見ました。

第二回「古典が伝える伝統的価値観」では、朝鮮古典小説の代表作「春香伝」を題材にしました。女性は「烈女」として権力者に抵抗して貞節や信念を守り抜き、男性は科挙に合格して官僚として出世することが強く求められるという「春香伝」の主人公たちの描かれ方から、現

代の韓国社会にも通じる価値観を見出すことができました。

第三回「軍事政権と民主化」では、韓国の現代史を学びました。不正選挙、民主化運動の弾圧、大統領の暗殺：日本から見えていた1960～80年頃の韓国は軍事独裁の怖ろしい国というイメージでしたが、韓国の一般庶民の目にはどう写っていたのか。政治に振り回された平凡な家族の姿を通して、韓国の現代政治史に触れました。

第四回「格差と断絶を越えて」は、社会から疎外された地方・高齢者・外国人労働者をテーマにした映画を取り上げました。格差や差別に直面する人々がそれを克服して互いに歩み寄ろうとする姿は、現実の韓国社会が目指すべき方向を示しています。日本人にとっても他人事ではなく、日本と韓国が抱える共通の問題と思われしました。

今回の講座では、マスコミ報道やインターネットの情報からは見えてこない韓国社会の過去の姿、現在の価値観、将来への志向を提示できましたと思います。さらに、韓国を知ることが日本社会について改めて考える機会となることを願っています。

(かとうあつこ・本学国文学科教員・
国際交流センター副センター長)



青少年の健やかな成長を願って

青少年健全育成推進大会

本学地域交流研究センターサテライト（都留市まちづくり交流センター内）に「都留市青少年健全育成推進大会」における講演の講師派遣依頼が寄せられ、本学教員の品田笑子先生に「健やかな成長を育む人間関係の形成と維持」と題した講演をしていただきました。今回、青少年育成都留市民会議会長の平井幸成さんに当日の大会のようすについて感想を寄せていただきました。

平井幸成

青少年が広い視野と正しい識見を培い、豊かな情操と高い徳性を磨き、有為な人間に成長することは、われわれ大人の願いであります。

青少年育成都留市民会議は青少年の健全育成を目指し、広く市民の関心を喚起するため去る11月13日都留市青少年健全育成推進大会を開催いたしました。この大会には192名の市民のご参加をいただき、そのうえ、市長、市議会議長、市教育委員長、教育長のご臨席をいただき開会されました。

大会は四部から構成されており、第一部は開会行事で、はじめのこぼれにつぎ市長の挨拶、議長への激励のこぼれ、大会宣言の採択が行なわれました。第二部は講演で講師には都留文科大地域交流研究センター特任教授の品田笑子先生をお招きして「健やかな成長を育む人間関係の形成と維持」と題して講演していただきました。

内容を要約しますと健やかに育てるために自尊感情を育てることが大切であり、自尊感情にはマズローの欲求階層の説明、集団は人を育てて人をい

する。ソーシャルスキルの説明と考え方、自己理解とは気づくことやがて発展・修正が行なわれる。自分の信頼する人の言葉に耳を傾け、尊敬する人がモデルになることなど丁寧に話されました。第三部は発表と表彰で、家庭や学校、地域社会のなかでいかに自己を磨き、他者との関係について考えを発表する場として作文・標語の募集をしたところ小学校5・6年生265名、中学校1・2年生269名の応募があり、標語は小学生319点、中学生215点、高校生346点、一般6点の応募がありました。審査員の厳正な審査の結果、作文は各学年とも市長賞、議長賞、教育長賞、市民会議会長賞に各1名ずつ選ばれ、標語は小学生、中学生、高校生、一般の各部に最優秀賞1名、優秀賞3名が選ばれており、この大会の席上授与されました。そして作文の優秀作品の発表披露として、谷村第一小学校6年岡本実留さん、都留第一

中学校2年生矢崎ねねさんの発表があり、万雷の拍手を受けました。第四部は閉会行事で、市民会議副会長の閉会のこぼれで、家庭、学校、地域が一体となって青少年の健全育成運動の一層の充実と定着化を呼びかけて閉会となりました。

（ひらい ゆきなり・青少年育成都留市民会議会長）



第三部：作文・標語の表彰式にて、表彰状と記念品が授与されました



第二部：品田笑子先生による講演会の様子

都留市まちづくり交流センターの一年

— 都留文科大と地域をつなぐ架け橋として —

■ 佐藤理恵

私が都留文科大地域交流研究センターのサテライト（都留市まちづくり交流センター内）に配属されて約1年、サテライトが設立されて約2年が経とうとしています。サテライトは地域のかたがたに大学をより身近に感じてもらい、さらに深く知っていただくことや大学と市民との交流促進を図ることを目的として設置されました。学生や地域のかたがたとお話しする機会も多く、素敵な活動をされているかたがたと多く出会えたことがとても印象的な1年でした。

私は、都留市広報「つる」の『協働通信』の欄を担当しており、毎月、地域で活躍しているかたや地域を元気にするような活動をしているかたを取材し、記事にしているのですが、この取材活動は私の密かな楽しみでもあります。私は都留文科大の卒業生で学生時代を都留で過ごしましたが、都留の伝統野菜である「水かけ菜」の栽培や都留市の新たな特産品の普及活動、自然のなかでの保育に目を向けた活動など、取材を通して初めて知ることも多く、自然や人の知恵・パワーの素晴らしさを目の当たりにし、毎回目に見えないプレゼントをもらったような気持ちになります。

人の力の素晴らしさは、『協働通信』の取材だけでなく、さまざまな場面でも実感しました。たとえば、まちづくり交流センター内にある交流室で行なわれた、大学生による「ふれあいお楽し

み会」の開催です。これを企画したのはどのサークルや団体にも所属していない2名の学生で、地域のかたがたを対象とした異世代交流を促すようなイベントを目的としていました。サテライトでは、地域でイベントを開催したい学生の相談窓口機能も担っており、一緒に準備を進めていききました。多くの方に参加してもらえよう、学生が小学校や公民館を訪れイベントの告知をしたり、楽しんでもらえるような企画を試行錯誤しながら練っている姿がとても印象的でした。どのくらいの参加者が来てくれるかはイベントが始まってみなければ分からない状態だったので少し不安でしたが、子どもからシニアまで総勢21名の方が参加してくれました。参加者の笑顔も印象的で、人の笑顔を生むのだと改めて実感しました。サテライトが、地域で何かをやりたい、という気持ちをサポートできる存在でありたいと強く思いました。

サテライトでは、他にも、学生ボランティアスタッフの募集や地域の講演会への講師派遣など大と地域をつなぐ業務を幅広く行なっています。今後、さらにサテライトが活用され、活気あふれるまちづくりに貢献できればと思います。

（さとう りえ・本学職員）



折り紙やクイズなどを通して、異世代間交流を深めました



都留市まちづくり交流センター外観

第10回地域交流研究フォーラムの開催

センターの歩んだ10年と新たな挑戦

— 図工・美術教育からの提案 —

■杉本光司

13:00 開会

第1部「センターの歩んだ10年」

杉本光司（地域交流研究センター長）

13:30

第2部 図工・美術教育からの提案

『たからばこ作戦』

司会：鳥原正敏（初等教育学科教授）

助言者：小松佳代子（東京藝術大学准教授）

■研究協力者の紹介

渡辺雅彦（都留市立旭小学校）

上田由紀子（兵庫県西宮市造形教室）

「こどもアトリエ」主宰者

■発表

・『たからばこ作戦』について概要：鳥原正敏

・システム『たからばこ』の操作と紹介：大輪

知穂（情報センター職員）

・システム『たからばこ』について説明：杉本

光司（情報センター教授）

・『たからばこ作戦』の実践について：鳥原正敏

・研究成果の報告：錦山拓人（初等教育学科特

任准教授）

■意見交流

16:00 閉会

第1部では、センター創設の際にも、センターを特徴づける契機となった問題の一つとしても掲げられておりました「地域交流」について改めて考えました。「地域交流」といっても、結局は大学に「地域貢献」を強いることになるのではないかとということです。大学は研究活動や学生を育て社会に送り出すことで社会貢献するのが基本だという考えです。この点は、創設以後、学科を超えた新しい研究・教育の「かたち」をセンターから発信するという役割を確認し、大学の「地域サービズ」活動に矮小化しないように努めてきており、その考えは、当然、現在にも引き継がれております。

センターの10年の多彩な活動・実践のなから、とくにフィールド・ミュージアム部門活動が飛躍的に展開される大きな契機となりました。2010年3月から6月まで開催されました国立科学博物館での「大哺乳類展」や、第7回から9回までのフォーラムのポストター、更にセンター出版物も会場内に掲示し、改めて都留文科大学における地域交流研究センターの果たしている役割の大きさを認識いたしました。

第2部において発表された『たからばこ作戦』とは、子どもたちがおもしろい学校の図工・美術の時間に作成した作品を撮影しデータベースで整理、管理しながら、参加者がこれを共有、活用することを目的とした取り組みです。この取り組みでは、アニメやゲームなどの一方通行な交流ではなく、ICT（Information and Communication Technology）を使った双方向な交流により、心や感性を磨き、造形表現活動を通して自己表現力やコミュニケーション能力の向上を目指していることが紹介され、研究協力を頂いている、都留市立旭

地域交流研究センターが本学の地域交流推進の礎として2003（平成15年）年4月1日に設立されてから10年が経ち、これまでの歩みを振り返ると同時にこれからのセンター運営に対する方向性を見いだす機会として、また、『たからばこ作戦』と名付けた図工・美術教育と情報教育の連携による新たな研究活動について発表させて頂く場として、平成26年9月27日（土）に第10回地域交流研究フォーラムを開催いたしました。当初、本年2月22日（土）の開催を計画しておりましたが、2月14日から降り続いた積雪被害の影響により延期とさせて頂きましたが、ようやく開催することができました。

当日の日程は、第1部としてこれまで歩んだ10年を改めて振り返り、引き続き、第2部では、センターにおける3つの部門活動「フィールド・ミュージアム」「発達援助」「暮らしと仕事」の一つであります「発達援助部門」における新しい活動として、図工・美術教育と情報教育の連携による、子どもたちの作品を撮影し画像・映像化した作品をデータベース化することを目的とした取り組み『たからばこ作戦』の実践について、ここに関わる人びとによる活動の概要、これまでの成果そして今後の計画について発表しました。

小学校の渡辺雅彦先生、兵庫県西宮市の子ども造形教室の上田由紀子先生にも出席頂き、この取り組みに関わった子どもたちの作品をデータベース化するだけでなく、大学生との交流、画像を編集して映像作品として日常的に展示利用できる環境提供との双方向な交流がもたらす取り組みにおける、データベースシステムの仕組みや実践、また実践をとおして得られた成果についても紹介されました。

助言者として参加頂きました東京藝術大学の小松佳代子先生からは、この取り組みがグローバル化を目指す国際バカロレアの視点から「教科の枠にとらわれない学び」、「探究」、「育成のための評価」というプログラムの実現にもつながる大きな可能性のある実践活動であるという励ましも頂きました。

当日はホームページを見て参加して頂いたかたや、他大学の美術専攻の学生さん親子など36名が出席しました。最後にアンケートをとおして寄せられました感想の一部を紹介いたします。

・図工や美術教育は、作品をつくり、展示されて終わるだけのイメージで、そこをとおってきた自分にとっては技術的な科目で、つまらない思い出が多かった。しかし、今回のフォーラムに参加して、技術的な制作と、その過程と結果について返してあげる言葉や感想が、子どもたちの感性を育て、鑑賞することの楽しみを知り、そこからつくる楽しさを知るといふのは非常に興味深く面白いと思いました。これからも今回のように、1つのことについて掘り下げ、新しい視野を広げてくれるような企画に参加したいと思います。(20代、男性)

・初めてフォーラムに参加させていただきました。情報といえば、1枚のちらしのみで、フォーラムの内容はおろか主旨すら把握していなかったのですが、皆様の発表を聞くことで目的や意義を理解しました。たからば「作戦」で作品と音楽と言語が同時に表現されたのはとても感動しました。少子化やインターネット社会など、自分が子どもの頃とは状況が違い、制約やリスクもたくさんあると思いますが、今後さらに多くの人たちに広がっていくことを期待しております。(30代、男性)

・「たからば「作戦」をするに至った経緯が今回よくわかった。子どもたちが学校で作った作品を家庭に持ち帰らせるとそれは作品からゴミとなり、捨てられてしまうことが多くなってきた。平面作品は保存しても立体作品は収納場所の関係で子どもたちの成長の証として保存されることは少ないと思われる。子どもたちの達成感を維持するためにも、この試みは注目されるべきものだと思った。また、画面を通じたコミュニケーションは、今後多様な活用が期待でき、楽しみである。課題もあるが今後も研究を続けてほしい。(60代、女性)

・地域における教育活動の拠点として地域交流研究センターの存在をありがたく思います。これまで多面に渡り尽力いただいてきましたが、今回の発表で更にこれからの良質な提案や情報を発信していただければありがたいと思います。(50代、男性)

(すぎもと てるじ・本学地域交流研究センター長)



●●編集後記●●

今回の巻頭文は、この「地域交流センター通信」の初代編集長を務め、本通信をここまで育て上げて来られた畑潤先生にお願いしました。本センターの10年の歴史を振り返りつつ、今後のあるべき姿に関して貴重な示唆をいただきました。

本学地域交流研究センターは、「地域の大学」としての蓄積をもとに、地域と向き合い、地域との共同的な研究・教育活動を進めるための拠点として2003年に発足した組織です。この10年余の活動実績から見ても、本学の特色を示す象徴的な機関として位置づけられています。本年度実施された大学基準協会による認証評価の結果においても、本センターの活動内容が社会連携・社会貢献に値し、本学の長所として特記すべき事項として特筆され、高く評価されているところです。

さらに、本年度COC推進機構が立ち上げられ、本学にとって地域貢献・地域連携事業が益々重要視されるようになり、今後本センターの担

う役割も益々重いものとなってくることでしょう。

私ごとになってしまい恐縮ですが、本年度後期のみという短い期間でしたがセンター長を務め、本センターの地域に根ざした活動が多岐にわたり、しかもそれぞれの中身が濃く、とても充実している姿を目の当たりにすることができました。改めて本学における地域交流研究センターの重要性を認識した半年間でした。

本号も、これまでのものに勝るとも劣らず、47ページにわたる大作となりました。統括編集者の北垣憲仁先生をはじめ、編集に携わったかたがたに心より感謝申し上げます。

読者の皆さまには、本通信を通して本学地域交流研究センターの活動をより深く知っていただくとともに、今後ともご指導、ご支援を賜りますようお願いするしだいです。

(地域交流研究センター長 麻場一徳)



絵・成瀬洋平 (本学卒業生)

地域交流センター通信 第26号：2015年3月16日

編集：都留文科大学 地域交流研究センター・通信担当 (編集長・北垣憲仁 麻場一徳 杉本光司 坂田有紀子 鳥原正敏 堤英後 品田榮子 田中正樹 八林幸恵 佐藤理恵)

(C) 発行：都留文科大学 地域交流研究センター
〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1 tel.0554-43-4341 (代)

統括編集者：北垣憲仁